

【追 悼】

西川祐子先生の思い出



2024年6月12日、京都文教大学名誉教授の西川祐子先生が逝去されました。

1996年の本学開学時より文化人類学科教授としてご活躍され、「文学論」「ジェンダーと文化」「メディア文化論」などの科目をご担当いただき、2006年度から2007年度にかけては本学人間学研究所の所長を歴任されました。

西川先生のご研究は、日本およびフランスの近現代文学研究、女性学・ジェンダー論、住まい・家族論、戦後史研究など、学際的で多彩な領域にまたがり、数多くの優れた著作が高く評価されています。特に2017年発表の『古都の占領：生活史からみる京都1945—1952』（平凡社・刊）では京都新聞大賞文化学術賞を受賞、2023年には京都市文化功労者として表彰されるなど、その業績は広く社会的にも認知されました。また、共同研究にも積極的に取り組まれ、学内外の研究者と意欲的に議論を重ねる中で、多くの成果を生み出されました。

しかしながら、西川先生が真に尊敬され慕われた理由は、その豊かな学識以上に、人としての温かさにあったのではないのでしょうか。教育の場や研究活動を通じて生まれる人と人との関わりを大切にされ、その気さくで思いやりのある人柄に触れた多くの学生や教職員が、研究者としてだけでなく人間としての生き方にも深く影響を受けました。

このたび『総合社会学部研究紀要』において追悼特集を企画するにあたり、主に京都文教大学における研究交流・教育活動を中心としたゆかりの方々へ追悼文のご寄稿を依頼させていただきました。長年の交

流を持たれた先生方だけでなく、若い世代の研究者の方々にも追悼文をお寄せいただくことで、西川先生の豊かな学問的業績とその影響の広がりを記録することを目指しましたが、その一方で、本紀要編集委員会からお声がけをさせていただいたという制約上、西川先生が歩まれた多様な研究領域・諸活動を網羅することは難しく、本来ご寄稿をお願いすべきであった知己の方々もこのほかに多数いらっしゃることにについては編集委員会としても心苦しく思っております。この場を借りてご諒解をお願いするとともに、西川先生への想いを共有いただける方々すべてに深く感謝を申し上げる次第です。

本特集を通じ、西川先生が生涯を通じて築かれた学問と人の繋がりを改めて振り返るとともに、心からの感謝と哀悼の意を表します。西川祐子先生の知の遺産が、その温かな人間性ととともにこれからも多くの人々に受け継がれていくことを願っております。

（京都文教大学総合社会学部研究紀要編集委員会）

西川祐子先生 略歴

1937 年 東京都生まれ
 1966 年 京都大学大学院文学研究科博士課程フランス語フランス文学専攻修了
 1966 年～1974 年 帝塚山学院大学専任講師、助教授
 1967 年～1969 年 フランス政府給費留学生
 1969 年 パリ大学・大学博士号取得
 1974 年～1984 年 大学非常勤講師、市民講座講師、作家活動
 1975 年 大阪大学教員公募人事に関する賠償を求めて提訴、1979 年全面勝訴
 1984 年～1996 年 中部大学国際関係学部及び同大学院教授
 1996 年～2008 年 京都文教大学人間学部及び同大学院教授
 2006 年～2008 年 京都文教大学人間学研究所所長

<受賞歴等>

2017 年 京都新聞大賞文化学術賞（『古都の占領 生活史からみる京都 1945—1952』
 平凡社／2017 年）
 2023 年 令和 5 年度京都市文化功労者

西川祐子先生 主要著作業績

【単著】

『森の家の巫女 高群逸枝』／新潮社／1982 年／（新書版 第三文明社／1990 年）
 『花の妹 岸田俊子伝』／新潮社／1986 年／（文庫版 岩波書店／2019 年）
 『私語り 樋口一葉』／リプロポート／1992 年／（文庫版 岩波書店／2011 年）
 『借家と持ち家の文学史—「私」のうつわの物語』／三省堂／1998 年／（【増補】文庫版
 平凡社／2023 年）
 『近代国家と家族モデル』／吉川弘文館／2000 年
 『住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋』／集英社／2004 年
 『日記をつづるとのこと—国民教育装置とその逸脱』／吉川弘文館／2009 年
 『古都の占領：生活史からみる京都 1945—1952』／平凡社／2017 年

【共編著】

『湘煙選集 3 湘煙日記』岸田俊子 著、大木基子・西川祐子 編／不二出版／1986 年
 『ノルマンディーの小さな村』ドニーズ・クバル・西川祐子・松本カヨ子 共著／朝日出版社／
 1987 年
 『フランス文学／男と女と』上村くにこ・西川祐子 編／勁草書房／1991 年
 『共同研究 男性論』西川祐子・荻野美穂 編／人文書院／1999 年
 『Kyoto, Provence』Monique Grandjonc・Yuko Nishikawa／Wallada／2000 年
 『京都フィールドワークのススめ あるく・みる・きく・よむ』鵜飼正樹・高石浩一・西川
 祐子 編／昭和堂／2003 年

『戦後という地政学（歴史の描き方 2）』ひろたまさき・キャロル グラック 監修、西川祐子 編／東京大学出版会／2006 年

『私たちが住みたい都市：徹底討論：身体・プライバシー・住宅・国家：工学院大学連続シンポジウム全記録』山本理顕 編、伊東豊雄・鷺田清一・松山巖・上野千鶴子・八東はじめ・西川祐子・磯崎新・宮台真司 共著／平凡社／2006 年

『戦後の生活記録にまなぶ—鶴見和子文庫との対話・未来への通信』西川祐子・杉本星子 編／日本図書センター／2009 年

『フェミニズムの時代を生きて』西川祐子・上野千鶴子・荻野美穂 共著／岩波書店／2011 年

『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします—向島からの挑戦』杉本星子・小林大祐・西川祐子 編／昭和堂／2015 年

『京大生・小野君の占領期獄中日記』小野 信爾 著、宇野田 尚哉・西川 祐子・西山 伸・小野 和子・小野 潤子 編／京都大学学術出版会／2018 年

『決定版 パリ五月革命 私論：転換点としての1968年』西川長夫 著、西川祐子 付論／平凡社／2018 年

『鶴見和子と水俣—共生（ともいき）の思想としての内発的发展論』杉本星子・西川祐子 編／藤原書店／2024 年

【翻訳書】

『母と娘の手紙』M. キュリー・I. キュリー 著、西川祐子 訳／人文書院／1975 年

『追いつめられた子どもたち』C. ロシュフォール 著、西川祐子 訳／人文書院／1978 年

『女性とは何か』E. シュルロ・O. チボー 編、西川祐子・天羽すぎ子・宇野賀津子 共訳／人文書院／1983 年

『十三人組物語』バルザック 著、西川祐子 訳／藤原書店／2002 年

『「人間喜劇」総序・金色の眼の娘』バルザック 著、西川祐子 訳／岩波書店／2024 年

【その他】

『ひとつの抗議：ある大学人事の裁判記録』阪大教養第 1003 号による公募人事を考える会 編／第三書館／1980 年

『女たちの夜の学校／その後』グループ光の領分 編／財団法人大阪市女性協会・クレオ大阪中央／2009 年

『ジェンダー研究を継承する（一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究叢書）』佐藤文香・伊藤るり 編／人文書院／2017 年

追悼文集 ご寄稿者一覧【敬称略、五十音順】

上野 千鶴子	認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長／ 東京大学名誉教授・社会学者
鵜飼 正樹	京都文教大学総合社会学部教授
大野 光明	滋賀県立大学人間文化学部准教授
萩野 美穂	女性史研究者／元大阪大学・同志社大学教授
長 志珠絵	神戸大学国際文化学研究科教授
春日 キスヨ	社会学者・元松山大学教授
加藤 千香子	横浜国立大学名誉教授
河角 直美	立命館大学文学部教授
黒澤 祐介	大阪青山大学子ども教育学部准教授
小林 康正	京都文教大学総合社会学部教授
佐藤 量	広島修道大学人文学部准教授／立命館大学生存学研究所客員研究員
篠原 聡子	日本女子大学学長／建築デザイン学部教授
治郎丸 慶子	社会福祉法人まちスウィング理事長
杉本 星子	京都文教大学総合社会学部教授
鈴木 (上垣) みちえ	大谷大学事務職員
高石 浩一	京都文教大学臨床心理学部教授
高木 博志	京都大学人文科学研究所教授
立石 尚史	京都文教大学事務局研究支援オフィス職員
田中 智子	京都大学大学院教育学研究科教授
鶴見 太郎	早稲田大学文学学術院教授
中谷 文美	関西学院大学社会学部教授
中林 (浦井) 基子	武蔵大学大学院人文科学研究科博士後期課程／ ケアマネウイズだいこんの花・主任介護支援専門員
橋本 和也	京都文教大学名誉教授
番匠 健一	特定非営利活動法人社会理論・動態研究所研究員
福島 幸宏	慶應義塾大学文学部准教授
松田 凡	京都文教大学名誉教授
森 正美	京都文教大学学長・総合社会学部教授

あなたと同時代に生きてよかった

上野 千鶴子

認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク [WAN] 理事長
東京大学名誉教授・社会学者

祐子さん。

そう口に出してみるとあなたの不在が身に沁みる。

このひとがいなくなったら ... と想像するだけで胸がしめつけられるような気がする ... 祐子さんは、わたしにとって、そんなひとのひとりだった。

ここ数年、外にお誘いしても、出るのが難しいと不調を訴えておられた。

いずれは、と覚悟していたが、その日がとうとうやってきた。

困ったとき、判断に迷ったとき。祐子さんならどんなふうを考えるだろうか、と思ってきた。おだやかだが辛辣な物言い、鋭い人間観察眼、ねばりづよく原点を踏み外さない思考 ... このひととの会話をどれほど楽しんだろう。

祐子さんとは 80 年代、京都にあった婦人問題研究会で初めて席を共にした。寿岳章子さんや脇田晴子さん、清水好子さんと関西の名だたる女性研究者の先達と知遇を得たのもこの場である。当時 30 代、駆け出しの社会学者だったわたしは、先輩の女性たちの経験に耳を傾けようと、意識して年長の女性の集まりに出かけた。

その研究会で、ある日、祐子さんが「フェミニズム」について報告をする機会があった。その場に祐子さんは、まだ十代だったか、ひとり娘の麦子さんを伴ってあらわれた。発表の冒頭に口にしたせりふが忘れられない。

「今日は、わたしの一番の批判者を連れてきました」

ごまかしを許さない、自分にきびしいひとだった。

祐さんと旅をした。

アメリカのワシントン DC にアジア学会に参加するために出かけた。荻野美穂さんが一緒だった。

中国研究者の笥久美子さんが率いる女性研究者のグループにご一緒して、中国の各地を訪ねた。

祐子さんが在外研修中のエクス・アン・プロバンスの寓居を、同じ時期に滞在していたドイツからお訪ねして、地元プロバンスの市場で生牡蠣を立ち食した。

淡路島にできた新しいホテルに泊まりたいとお誘いし、春の淡路島でおいしい魚料理をご一緒した。

どの旅でも祐子さんは、好奇心を全開にして裏通りに入り込み、現地のひとと交わり、スケッチブックを取り出して絵を描いていた。いつのまに、と思うような早業だった。

遺著になったバルザック『人間喜劇』が、ご遺族の案内とともに送られてきた。

長い後書きの中にこんな文章があった。

博士論文でバルザックを論じた祐子さんが「バルザックを専攻する研究者にはならなかつ

た」理由を、「バルザック論を講義する大学研究職ポストにいなかった期間が長く、その間は自分のバルザック論の読者を確保する、ないしは読者を創出することが難しかった」からと。

その結果、祐子さんは「自分がその時々にかかえる生きるための問題を、同じ問題をかかえる仲間たちとともに考えながら、女性史、女性学、ジェンダー論そして生活史研究を名乗るなど、しだいに領域横断型の研究者として仕事をするに至った。」

順調だった夫の長夫さんのアカデミック・キャリアに比べれば、妻の祐子さんのキャリアは不当、不遇な扱いを受けていた。阪大文学部仏文科に採用が内定していたにもかかわらず、前職をすでに辞していた祐子さんの内定が教授会の事情で先延ばしになり、祐子さんのキャリアは突然宙に浮いた。密室人事の不当性を法廷に訴えて、勝訴したのは祐子さんの闘いだった。あの穏やかな女性のどこにそんな闘志が、と思うが、あとになって祐子さんは裁判闘争を「たのしかったわよ」とのたまう。だが、もし採用されていれば、わたしたちはひとりのすぐれたフランス文学研究者を持つ代わりに、日本における女性史・女性学研究者のパイオニアのひとりを手放しただろう。そのおかげで、わたしたちは評伝から文学批評、生活史、占領研究など、祐子さんの多彩な作品の読者となれたのだ。

遺著となったバルザックの翻訳の「解説」の日付けは、「2023 年夏」となっている。祐子さんは京都の夏を耐えがたく感じておられた。その秋、祐子さんは倒れて、長い闘病の末、帰らぬひととなった。最後の力をふりしぼって、バルザック研究という原点に立ち戻られたのであろう。

このひとと同時代を生きることができてほんとうによかった、と思えるひとが、人生には何人かいる。祐子さんはまちがいなくそのひとりだ。

祐子さん。

あなたがわたしと共にしてくれた時間を、わたしは忘れない。

初出：認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 2024.6.28

<https://wan.or.jp/article/show/11330>

西川祐子さんとの共同研究

鶴飼 正樹

京都文教大学総合社会学部教授

1996年4月に京都文教大学が開学し、私は西川祐子さんの同僚となりました。開学まもない5月、志摩半島にある京都市の研修宿泊施設であったフレッシュマン・オリエンテーションで、夜遅くまで新入生たちと、サークル活動をどうするかといったことを話し合っていた姿が、記憶に残っています。私はといえば、それを横目で見ながら、キャンプファイヤーの火の後始末を楽しむ、じつに無責任な新任教員でした。

私は、人が取り上げそうもないテーマを自分でみつけて、それを一人で、マイペースで、とことんまで追究するのが好きなタイプの研究者なので、人とテーマを共有し、スケジュールを調整しなければならない共同研究が苦手です。西川さんは、そういう私を、かなり強引に共同研究に誘ってくださいました。ジェンダー、京都論、ニュータウン、生活綴方、鶴見和子。どの共同研究でも私は、西川さんをものすごく手こずらせ、ご迷惑をおかけしたと思います。

西川さんは、共同研究の成果を本にして、社会へ発信することにも熱心でした。それは西川さんに、どんなかたちであれ、成果を世に問うことが、のちの世代の研究につながるのだという、信念があったからだと感じます。共同研究の最初の方から出版社の編集者が参加され、研究期間が終わると、かならず原稿の催促が始まります。いかげんなメンバーの私には、原稿を書くことがひと苦勞でした。締切に間に合わず、逃げてしまいたくなるのですが、私の研究室は建物の入口近くにあるため、思いがけないタイミングで西川さんに出くわしては、気まずい思いをするのでした。

それでも何とか私が書きあげた中で、「鉄道マニアの考現学」(西川祐子・荻野美穂編『共同研究・男性論』所収)と「生活綴方からつながる世界」(西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』所収)は、今でもときおり引用されることがある論文です。西川さんの熱心な催促があったからこそ、苦しまぎれに考え続けるうちに、思いがけない着眼点が引き出されたのだと思います。

『京都フィールドワークのススメ』(昭和堂、2003)では、西川さん、高石浩一さんとともに、私も編者として名前をつらねました。「あるく・みる・きく・よむ」をどのように本のタイトルに入れるか、「見聞読歩」というタイトルはどうだろうか、などと、人間学研究所の大きなテーブルを囲み、議論しながらの編集作業は楽しいものでした。「京都論マトリクス」(同書3ページ)も、編集中の議論から、ふと思いついてホワイトボードに描いたものです。

この本だけは編者だったので、私は真っ先に原稿をしあげ、催促する側に回りました。専門的な研究成果の発表ではなく、「よそ者」として京都の町にアプローチして、切り口のおもしろさを伝え、読者が「自分でもやってみたい」と思える文章にしてくださいと、執筆者にはかなり無理な注文をつけました。それぞれの文章の最後には執筆者自身に「フィールドワークのたねあかし」をしてもらい、「あるく」「みる」「きく」「よむ」をめぐる座談会も収録しました。

西川さんは、私が書き散らした「はじめに」を、「あとがき」で、きっちりと締めてくださいました。小さな本ですが、その後同じ出版社から続々と出される、各地の大学教員が執筆した『大学的〇〇ガイド』シリーズより、一歩も二歩も先を行き、出版から20年以上をへても十分に読むに耐える内容だと、読み返して思いました。

現在私は、ともいき研究推進センターという、京都文教大学の研究活動を推進する機関のセンター長をつとめています。研究をめぐる環境は、西川さんが大学にいらっしやったころに比べて、悪くなっているといわざるをえません。とりわけ、共同研究のむずかしさを痛感します。同僚と研究の話をすることも、ほとんどなくなりました。

共同研究の苦手な私がいふのもどうかと思いますが、京都文教大学における共同研究の可能性をあきらめずさぐっていくことが、西川さんから与えられた課題だと感じています。

いつかどこかで再び会うために

大野 光明

滋賀県立大学人間文化学部准教授

私が西川祐子さんと交流を深めるようになったのは、2012年11月に祐子さんの夫の西川長夫さん（大学院時代の指導教員）が胆管癌を患い、入退院をくりかえされた頃からでした。長夫さんを囲んでのご自宅での研究会、その成果をまとめた『戦後史再考』（平凡社、2014年）の編集作業、刊行後もつづいた「戦後史再考」研究会、そして折に触れての長電話などを通じて、祐子さんとお話することが増え、さまざまなことを教わりました。

まず何よりも資料を徹底して集め、整理し、読むという研究者の基本的な態度です。祐子さんのこれまでのご研究の集大成であった『古都の占領——生活史からみる京都 1945-1952』（平凡社、2017年）の執筆時期には、ご自宅に収集資料のファイルが並べられ、たくさん付箋がつけられていました。同書は京都府庁文書「進駐軍事故見舞金支出負担行為書」の長い時間をかけた読解と記録されていた交通事故の場所を地図に落とし込んでいく地道な作業が基礎となっています。この地図とともに、祐子さんは聞き取り調査とフィールドワークをされ、新聞・文学・漫画などを含めた「集合的記憶のパッチワーク」をまとめられました。私はこの本の方法論や文体に圧倒され、深く感動しました。

生活史を大切にされた祐子さんは、研究者であるだけでなく、生活者でもあると思うことが多くありました。町内のお地蔵さんの掃除が大変だと困りながらも楽しんでいるように見えたり、ご自宅のお庭に咲いたお花のようすや旬の食材についてなど、生活に根ざしたお話をよく伺ったからです。誰もが生活者であるのですが、それを感じさせる研究者はそう多くありません。祐子さんは、ご家族のケアや地域の仕事を引き受けざるをえないなかで、日々の生活を社会とその変化を感受する定点観測の現場としたのではないかと思います。2023年3月にお電話をいただいたときに伺ったお話のメモにこうありました。「新聞きり抜きの習慣、コロナでやめられなくなった。そしてウクライナ」、「戦争をしない／させない言説はどこにあるのか」、「ロジックは正義に即して行われる。レトリックもある。言説戦争」、「生活はイデオロギー闘争の現場」。祐子さんは日常生活のなかで、社会の変化を読み解く方法や感性を研ぎ澄ませていたように思いました。

私は祐子さんから人との向き合いかたも学びました。『戦後史再考』をまとめていた頃、いただいたメールに次のような言葉がありました。「危機感の共有とは同じ言葉を同じように使えるようになることではなく、それぞれの切迫した危機感をべつべつの言葉で発信し相手の危機感をも理解すること」。そして、「べつべつの言葉」であってもやりとりをつづけ、「言葉の獲得」を助け合うことが大切なのだ、と。人間関係のヒエラルキーや権力関係が反映されてしまいがちな「一致」や「合意」よりも（それも大切なときはありますが）、それぞれの「言葉の獲得」のプロセスに自分と他者をひらいておくこと、それが対話だということです。現代のコミュニケーションのありようをみると、祐子さんのこの言葉は重く、深いものです。

祐子さんが残してくださった言葉や本を、私も「言葉の獲得」のためにくりかえし読み、対話をつづけたいと思います。私たちは誰かの存在と言葉に助けられ、別れてはどこかで再び出会う。「危機」の時代にあって、『古都の占領』に記された「死ぬな、殺すな、生きのびよ」という言葉へ立ち返り、生きていこうと思います。祐子さん、ありがとうございました。

西川祐子さんとの思い出

荻野 美穂

女性史研究者／元大阪大学・同志社大学教授

西川祐子さんとは、1996年に京都文教大学が開学した時から4年間、同僚として過ごした。その前から女性史や女性学関係の研究会などで出会ってはいたのだが、「今度、新しくできる大学と一緒にジェンダー論を教えない？」と誘われて、喜んで前の大学を辞めて移ってきたのだ。

ただ、当時の所属が西川さんは文化人類学科なのに対し私は臨床心理学科で、研究室も別の建物だったのは寂しかった。今だから正直に言うと、私は臨床心理学科の雰囲気にもどうもなじめなくて、結局4年で別の大学に移ることに決めた。でも、クラスでの学生さんたちとのやりとりは楽しかったし（その中には、今でも連絡を取り合っている人もいる）、新設大学に集まってきたいろいろな分野の専門家たちとおこなう研究会活動も刺激的だった。その一つの「ジェンダー研究会」からは、西川さんと私が編者となって『共同研究 男性論』（1999年、人文書院）という成果も生まれた。一見、おっとりとした鷹揚に見える西川さんは、いざ議論となるとぐさりと厳しい発言をし、実は中身は熱くてこだわりの強い、良い意味で「しつこい」人なんだということ、この期間中に知ることになった。

2000年に私が大阪大学に移った後も、西川さんとは公私にわたって交流が続いた。古久保さくらさんも誘い、3人で沖縄本島を旅して地元の女性史研究者の方と交流したこともあった。西川さんと阪大の間にはその昔、採用人事をめぐる不当な被害をこうむった西川さんが大学側を訴えて、裁判で勝訴したという因縁話があった（詳しくは、西川祐子・上野千鶴子・荻野美穂『フェミニズムの時代を生きて』岩波現代文庫、146頁以下に）。私はこの裁判のことはほとんど知らなかったのだが、阪大に移った後のある年、西川さんに集中講義を依頼し、彼女がそれを引き受けてくれた時、昔の裁判のことを知る教員から、「よく西川さんが承知しましたね。これでようやくあの件も終わり、ということかな」と言われたのを憶えている。

その間も西川さんは、京都文教大学で向島団地や鶴見和子文庫にかかわる共同研究などを主催するかたわら、次々と個人での仕事も発表し続けていて、研究に寄せる情熱とエネルギーは停滞や衰えということを知らないかのようなようだった。そうした仕事への愛は大学を定年退職された後も変わらず、おそらくは倒れられたその時まで、彼女にとっては研究こそが最高の趣味、楽しみであり続けたのではないかと想像する。そして、思うままにそれに浸ることをしだいに許さなくなったご自身の老いや病に、はがゆい思いをしておられたのではないかと、とも。

西川さんの数多くの仕事は、どれも彼女ならではの綿密な調査と熟考の産物で甲乙つけがたいのだが、その中からあえて私にとっての代表作を3点あげてみたい。1点目は評伝という彼女の得意分野で、私が最初に読んで強烈な印象を受けた『森の家の巫女 高群逸枝』（新潮社、1982年）。2点目は、近代家族と住まいという終生のテーマをわかりやすい授業形式で論じた『住まいと家族をめぐる物語——男の家、女の家、性別のない部屋』（集英社新書、2004年）。そして3点目は、「調べ魔」としての西川さんの面目が最大限に発揮された『古都の占領 生活史からみる京都 1945-1952』（平凡社、2017年）。

西川祐子さん、たくさんの素晴らしい仕事と、共有した楽しい時間の思い出をありがとうございます。

書きつくせずに改めて気づく―祐子先生のこと

長 志珠絵

神戸大学国際文化学研究所教授

もともと読者だった。直接お見かけしたのは、中部大学におられた1991年頃だろうか。草創期の立命館大学言語文化研究所は、近代国家の再検討として近代家族論を発信し、その中心として祐子さんは、近代国民国家による見せかけの私的領域の構築とその政治性を文化研究の手法で矢継ぎ早に提起してみた。特に生活史と近代国家論をつなぐ枠組みは衝撃的であり、無自覚にマチスモな日本近代史世界を逆照射した。駆け出しの歴史研究者には圧倒的な影響力があった。加えてこの時期の京都では、積年の系譜を持つ女性研究者の集まりが女性史総合研究会として活性化し、祐子先生は会誌の『年報女性史学』でも創刊号（1991年）から編集を担われた。私は例会で脇田晴子先生等の『ジェンダーの日本史』上下巻（1994年）の書評者となり、そのご縁からか、1995年（第6号）から編集委員となった。祐子先生が2010年に委員を退かれるまでご一緒できたことは得がたい学びであった。特に16号（2006年）では、婦人問題懇話会に連なる清水好子・寿岳章子両氏の追悼企画として、脇田晴子・寛久美子・西川祐子の3氏に座談会をもってもらった。この時の、特に西川・脇田の丁々発止、緊張感溢れる様は今も強く印象に残る。祐子先生の語りはそもそも深いが、女性史・女性研究者としてのパイオニアでありロールモデルがあったという語り、加えて、先人にしてもらったことはその人には返せないが、次の世代に――との言は、18年前よりもいっそう、重い。

同時代にあっては尚更だ。この間、1997年には海外科研にご一緒するほか、荻野美穂先生とともに企画された『共同研究・男性論』では直接学び、鍛えられる日々だった。そもそも海外シンポの参加も生後2ヶ月の乳飲み子を置いての渡米であり、祐子先生のエンパワメントなくしておそらく実現していない。一般向けの論考を書くようにとの機会をいただいたうえ、先行研究論文をはじめ、史料も入った大箱が郵送されてきたこともある。読者に研究を届けるとはどのような営為か。「日本史」世界の文法を気にする私に、学問姿勢やその哲学を問われることもあった。これほどの学びを次世代に返せるものだろうか。

現在使用中のメールソフトにも祐子先生とのメールのやりとりが大量に残っている。遡及できた初見は2009年6月25日、お会いするための段取りメールだった。日米科研の成果、『戦後という地政学』（2006年）で私は、文献屋として占領期研究を開始しており、いよいよ京都の占領期研究に着手された先生からお尋ねメールが届く時期のやりとりだった。当初から占領期の地図を探するなど、都市の生活空間を把握されようともしていた。が、時間は午前2時46分！70歳を超えておられるわけで、今更ながら「お体ご自愛いただかねば！」と声かけしたくなる。が、あの名著につながる作業としては、まだ府庁文書の進駐軍事故調査資料の情報を得ておられない。

一方、当初から小野信爾先生の獄中日記の裏付け作業は焦点でもあった。まだ学生だった小野先生の逮捕と軍事裁判について、SCAP/LS文書にたどりつき（私は子どものお使いよろしく、フィッシュ番号がわかった時点で憲政資料室にこの史料を探しにいき、軍事裁判の被告名の一覧から小野先生の名前を見つけて小躍りし、ミッションを果たして帰京しました！）、他方で聞き取り作業や接収住宅調査を展開し・・・と気が遠くなるような地道で

膨大な作業を続けていかれたことになる。京都文教大学にうつられてから本格的に着手された京都研究の、都市・空間・住まい・生活をあわせた総合研究、日記研究と交差する小野先生の獄中日記、『女たちの夜の学校／その後』で駆使されたような、時間を重ねてのグループ聞き取り手法など、こののち、祐子先生の卓越した作業が展開されていったことを痛感した。

私はおそらくご家族以外で最後にお声を聞いた可能性が高い。しかし倒れられて以降に上辞された3冊の本の、特に最初の1冊、『増補 借家と持ち家の文学史』は、パンデミックを意識された書き下ろし部分も含めまさに「増補」だが、後書きの日付も含め、倒れられる直前まで根を詰めた夜中の仕事をされていた気配を感じた。1990年代の半ば、締め切りに遅れての原稿を夜中——を通り越して明け方にポストインしに行ったことがあった。まだ改築前の西川邸は1階も2階も赤々と電気がついていて——その光景を思い出し、ご回復の報を宿望しつつも難しいかもしれないと思った。ご一緒した占領期研究の調査や作業一つとってみても、まだ先生に託された宿題、はたせていません。ご期待にそえるよう精進いたします。とともに、改めて心からの感謝とともにご冥福をお祈りもうしあげます。

祐子さんのこと

春日 キスヨ
社会学者・元松山大学教授

祐子さんと最初に出会ったのがいつの頃だったのか？京都精華大学に私が勤務していた1990年代初めには、大覚寺の隣りにあった高齢者施設と一緒に通っていたので、それ以前からだったのは確かです。

私の場合、祐子さんから二つの面で大きな学びをしてきました。一つは研究者としての彼女の仕事から。新聞記事の切り抜き、詳細な聞き取り調査、膨大な文献資料等の収集読破を踏まえ、ひとりの人の息遣いが聞こえる暮らしの次元をマクロな社会的事象と交錯させ関連づけ、時代の社会特性、歴史的変化を明らかにしていく重厚な仕事にはいつも目を見開かされ、触発されてきました。

しかし、そうした研究者としての面だけでなく、生活者としての彼女からも多くの学びを与えられてきました。実は私と祐さんは研究仲間というよりも、私の夫が作る野菜を彼女が倒れる直前まで送り届けた「野菜友達」とでも呼べるような仲でした。だから、野菜というモノを介して彼女の人柄に深く触れ、人とのつき合い方、モノとの向き合い方を学んだのでした。

それがどんなものだったか。今の時代、モノを贈ると間髪を入れずにそれに相当なモノが「お返し」されることが多いのですが、祐子さんの場合、そんなことはありません。「お返し」でこちらが元気になり、励まされるのです。野菜を送ると、まずは「着いた」という「お礼メール」が届きます。そして、その「お礼メール」が彼女ならではのもので、本文には感謝の言葉とともに送った野菜でつくった料理のメニュー、レシピ、その美味しさが書いてあり、さらに、添付された写真には、送り出した時には泥さえついていた野菜たちが、美しい布で覆った台の上、きれいな編み籠に一つひとつの顔をして並び収まり、色鮮やかに輝く姿で写っているのです。

これは自分が育てた野菜の晴れ舞台を見るうれしさ、野菜をつくってよかった、送ってよかったという二重三重の喜びを与えてくれました。それに「野菜をこれから送ります」という連絡のついでに彼女とする長電話、いま取り組んでいる研究テーマや、あれこれのおしゃべりは、「祐子さんのように私も頑張ろう」と何歳になっても研究を続けていく元氣と刺激を与えてくれるかけがえのないものでした。

でも、その祐子さんがもういません。寂しく、自分の一部が抜け落ちたような気がします。

祐子さんとの共同研究——宿題となった「生活史」

加藤 千香子
横浜国立大学名誉教授

ふり返ると、私が女性史研究者としての西川祐子さんに惹かれるようになったのは1990年代からでした。家族社会学の落合恵美子さんとの「近代家族定義論争」のインパクトも大きかったのですが、最初に接したのは1997年一橋大学での歴史学研究会大会です。「近代日本における“マイノリティ”」というテーマを掲げた全体会で、祐子さんは「女性はマイノリティか」とマイノリティを規定しようとする歴史研究者の認識を問うたのです。その挑戦的な姿勢に私は溜飲を下げながらも会場で拍手を送るだけだったのですが。

祐子さんとのおつき合いはそれから10数年後、2013年秋の西川長夫さんご逝去後の「戦後史再考研究会」から始まりました。それから祐子さんが倒れられるまでの10年あまり、ご一緒したいろいろな共同研究の何と知的刺激と楽しみに満ち、どんなに目を開かせられるものだったことか。二度とないその時どきを思い出すと切なさがつのります。

戦後史再考研究会で祐子さんが選ばれたテーマは「占領」でした。占領の渦中に「占領とは何か」を論じた論文を探りあてられ、著者の国際人権法学者・宮崎繁樹氏との対話を実現されました。私も同席させていただいたインタビューは、祐子さんが繰り出される質問に宮崎氏がしばし熟考して応答する、和やかななかに緊張感がある3時間に及ぶ同時代史の対話の場でした。90歳を迎える宮崎氏から「迷っています」という言葉を引き出して面白がっておられたことが思い出されます。

次に誘っていただいたのは、京都文教大学の鶴見和子文庫を中心とする共同研究「鶴見和子と水俣」です。和子文庫の調査後に祐子さんのお宅でおしゃべり、時には泊めていただくというパターンができ、それはコロナ禍での行動制限によって叶わなくなるまで私の大きな楽しみでした。祐子さんは次第に文教大に行くのが難しくなりましたが、その代わりにご自宅書庫で『月刊地域闘争』（京都ロシナンテ社）を読まれ、水俣の甘夏の記憶をたどるためその当時に水俣の甘夏を購入した人びとに電話や郵便、メールでインタビューされました。祐子さんは1970年代の「水俣病事件」の京都での当事者でもありました。

「生活史」の定義を一緒に考えましょう、と言われたのはその頃でした。『古都の占領』（2017）で提唱された祐子さんの「生活史の立場」は、“社会史”のそれとは異なります。祐子さんの「生活史」は「生活」を政治・経済・思想をめぐる闘いの場としてとらえ、その無数の小さな物語から大きな物語をとらえ直そうとするもので、重視されたのは、当事者研究という視点を手ばなさないこと、状況を単純化しないことです。この「生活史」を定義し言語化しておかなければいけないと祐子さんはくり返し言っておられました。

『戦後史再考』（2014）で祐子さんは西川長夫さんからの問いかけに答える形で、「私にとっての戦後史」を「フェミニズムの時代」と表現し、「私が当事者として生きたフェミニズム」と言い切っておられます。常に「生活」の当事者として「政治・経済・思想」をめぐる闘いを続け言葉にしてこられた祐子さんの実感なのだと思います。「フェミニズムの時代」を生きた祐子さんがこだわった「生活史」の定義は、「瞬間の共同体」を共にした者に残された宿題となりました。

西川祐子先生との思い出

河角 直美

立命館大学文学部教授

2022年5月、日本建築協会京都支部主催の研究会で、私は西川先生とともに京都の接収住宅について報告しました。世間がコロナ禍を脱しつつあったとはいえ、研究会の準備は電話でのやりとりが主となり、先生は報告にむけて厳しい意見を電話越しにおっしゃられ、その強い口調に身の引き締まる思いでした。先生との共同研究は、それが最後となりました。

私は、戦後京都の街なみが描かれた、京都府立京都学・歴彩館所蔵『京都市明細図』のデジタルアーカイブに関わるなかで先生に出会い、京都の占領期研究に取り組むこととなりました。2013年に実施された市民の方々と交えたワークショップもその成果のひとつです。先生とともに占領期を経験された方々にお話を伺うときは、必ず関係する地図を印刷して持参しました。地図を介して記憶を紡いでいくなか強く感じられたことは、歴史を問うときに個人の行動や考えにも目を向けることの必要性でした。

先生にお会いするまで日本の占領期を追求したこともなかった私にとって、研究の背景にある先生の意図や考えをお聞きすることは、私の視野を広げるものでしたが、緊張をともなうものでもありました。地図を読み、地図で表現することで空間がもつ意味を問うてきたつもりでおりましたが、先生の鋭いご指摘やご助言を受けるなか、ときに気落ちし、ご期待に沿えるような事象を描けなかった地図もありました。

こうした議論の場は、先生のご自宅の書庫が主でしたから、書庫でご一緒した時間ばかりが思い出されます。ただし、思い浮かぶのは、書籍に囲まれながら資料を開きPCの画面に向かったことはありません。先生の手料理です。ゆっくりと過ごした時間、初めて食したフランスの家庭料理、桃の節句のちらし寿司……。私が緊張していることに、先生は気がついておられたのかもしれませんが。いつしか私は、ご馳走とおしゃべりを楽しみにして、書庫へ向かっていたのでした。

先生が2017年に『古都の占領』を刊行された後も、先生は時折お声をかけてくださりました。2020年のコロナ禍以降、直接お会いすることができなくなったことは寂しいものでしたが、先生から届くメールやお電話を楽しみにしていました。ご自身の研究成果の発信に地図を添えたいとおっしゃり、その作製を依頼されたときは、うれしく思う反面、やはり何とも言えないほど緊張したことを覚えています。その時も、ご期待に沿える地図であったのかどうか不安でしたが、先生は使ってくださいました。

また必ず書庫へ参り、できれば手料理をいただきたいと、わがままな希望を抱いておりましたが、叶いませんでした。私の気持ちに寄り添ってくださった先生に心より感謝しつつ、今後も人々の日常生活に目をむけながら、研究を続けてまいりたいと思います。

世界平和

黒澤 祐介

大阪青山大学子ども教育学部准教授

私は1998年から3期生として京都文教大学に在学し、西川祐子先生にはゼミをご担当いただきました。在学中は本当にお世話になりましたが、恥ずかしながらその多くは研究指導ではありませんでした。例えば、非常勤の先生がご担当の「フランス語」を4回生まで落とし続けた時には「テキストを持って研究室に来なさい!」とマンツーマン指導を受け、フィールドワークの授業で担当の先生に注意を受けた時には「私が一緒に謝りに行くからついてきなさい!」、はたまた、出席状況が芳しくない授業に対しては「私が試験のことを聞きに行っておけるから、あなたも来なさい!」と、方々へのお詫び行脚に付き合っていました。

当時の私はこのような調子でしたから、西川先生から学問的なことを学び取る準備もできておらず、きっと西川先生も私を研究者として育てたとは思っておられないと思います。西川先生には口癖のように「私はあなたのお母さんじゃない!おばあちゃんじゃない!」と叱られつづけてきましたが、「まっとうな人間になりなさい!」と決して見捨てることなく教育をしていただいた経験が、私の人間としての土台となりました。

ですから、私には「西川先生の研究指導を受けた教え子です」と名乗る資格はありませんし、西川先生の研究について語る言葉など持ち合わせてはいません。ただ、大学で働く中でくり返し聴こえてくる西川先生の言葉があります。いつだったか、ふとした時に私が「先生はなんで研究をしているんですか?」と尋ねたことがありました。西川先生は笑いながらこう答えられました。

「私は、自分が何にだまされて生きてきたのか、それを知りたいの。」

今、大学の研究者として働く中で、様々なことに翻弄され、見えている世界がゆれ動き、目指すべき道を見失いそうになることが多々あります。そういった時に、あの時の先生の言葉と笑顔は「研究者として生きること」の責務と覚悟と、それから喜びを何度も思い出させてくれています。

また、卒業から5年後、私の結婚式では乾杯の挨拶を引き受けていただきました。結婚式くらい私のことをほめてくれるだろう、という浅はかな期待に反して、西川先生の挨拶はたったの一言だけでした。だけれども、その力強い言葉を生涯忘れることはできません。

「お二人の未来と世界平和を祈って。乾杯。」

西川先生は、「受けた恩は本人には返せない、だから、誰かに渡すのだ」ということをおっしゃっておられました。

西川先生が紡いでこられた思いを、〈世界の平和〉が実現するまで絶やすことなく次の学生たちに紡ぎ続けていくことが、私に与えられた唯一の使命だと思っています。

もう、西川先生に叱ってもらうことはできませんが、なんとかやってみようと思います。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

個人的な思い出、そして、人間学研究所と西川先生のこと

小林 康正

京都文教大学総合社会学部教授

何よりそれは私にとって苦い思い出だ。今思い返してみても、冷汗がでるような記憶なので、書くのが億劫だ。だが、この出来事を記さないと、さらに罪を重ねるような気持ちになるので、あえて書くことにする。

当時西川先生と私が所属していた文化人類学科は、「先生」と呼んだら罰金を取るといった、良く言えば率直さと公平さを旨とするような、悪く言えばソフィストケイトされない雰囲気をつくっていた。学科会はその「市民的公共空間」の最たる場で、直截的な発言が不用意に往還し、揚げ句は激して言い合いになったり、紛糾する場面も珍しくなかった。こうした物言いはほとんどの場合は善意なのだが、ぶつけられた側がダメージを感じることもしばしばだった。

その時話題に上ったのがサバティカル休暇の選考だった。ちゃんとした機関であれば、事前に根回してから提出されるような案件だが、文化人類学科の主義によって、公論に決すべしと、誰に決めるかといったことが「平場」で議論されることになったと記憶している。この時の希望者として西川先生がいらして、どんな経緯か忘れたが、ご自分の就職時の苦勞を語られたのだった。詳しい事情はわからないが、いずれにしろ、切実な思いからの発言だったように思われた。

これに対して、先のような学科の雰囲気に浮かれていた私は、あろうことか、「ここにいる者で就職に苦勞してない者なんていません」と言い放ってしまったのである。言い訳になるが、この時の私は、西川先生が大学の内定を反故にされて法廷闘争に及んだという経験をお持ちだったとはつゆ知らなかった。

会議の終了後、先生が廊下で私を呼び止められ、頭を深く下げてご自分の発言を謝罪された。目にうっすら涙を浮かべられていたのをみて、私は驚き、とんでもないことをしてかしてしまったらしいことに、その時はじめて気づいたのである。今、思い返してみれば、ご自分の真意を理解してもらえない悔しさ、苦しさだったのだろうか。

これには後日談がある。何年後かのサバティカルの選考で、個人的な事情もあって今度は私が、「何としても次を自分にしてくれ」と学科会で孤立無援を承知で頑張った。もちろんメンバーはいい感じはしなかったと思う。しかし私は必死だったのである。

やはり会議終了後、先生が私を呼び止められて、「あんまりあせりなはん」とやさしく言って下さった。私にとって、これは涙以上のパンチであったと思う。その時の先生の気持ちは推しはかるべくもない。そこにはまったく嫌味はなかったが、私自身は以前の愚かなる言動を思い返さざるをえず、口の中に苦さが広がった。

こんな愚にもつかない懺悔めいた思い出だけで終わると読みかけた読者には申し訳ないので、西川先生の京都文教大学人間学研究所でのご業績について触れることでせめてもの責としたい。

京都文教大学は研究大学ではないが、その開学当初はユニークな学問的な意気込みをもっていた。それは、当時の勃興隆盛する文化人類学と臨床心理学という2つの新しい学問的

ディシプリンに、それを仲介する存在としてのジェンダー研究を加えることで、人間についての新たな学識を創造しようという試みであり、「人間学」と名付けられるものだった。その研究推進機関として設置されたのが人間学研究所であった。

西川先生のご研究は幅広く多様であるが、京都文教大学に在職した期間中の研究の多くは、この人間学研究所のプロジェクトに関連するものである。西川先生の活動を語るうえで人間学研究所を抜きにして語ることはできない。

西川先生が文教大学をご退職になる直前の2年間（2006、7年度）に、第4代目の人間学研究所所長を務められ、共同研究としての人間学の稔りに大きく貢献したが、そのかわりは開学初年度より研究所のプロジェクトとして「ジェンダー研究会」を組織したところからずっと継続されたものである。ご本人も、以後の研究会では「ジェンダー」の看板を表に掲げることはしなかったが、その趣旨の中にはつねに「ジェンダー」論的な観点が含まれていたとおっしゃっている。所長時代の一連の共同研究はその結実であった。

人間学研究所の最後の所長を務めた関係で、その歴史をまとめる際に私は西川先生にインタビューをさせていただいた（2016年6月10日）。それをもとに所長としてのご業績を「3. 学際研究の完成 - 西川祐子所長」（『人間学研究所20年のあゆみ』）として簡略に記しているので参照していただければ、ありがたい。ここではそのなかで触れられなかったことを少しだけ紹介しておきたい。

お話を伺ってまず気づいたのは、西川先生が中心となって進められた共同研究の多くが、研究（する者）と教育（される者）を截然と分けないことである。当時「学際研究」なる言葉が流行り、共同研究が盛んとなっていたが、それは異なる専門分野の研究者の共同を指していて、あくまで研究は専門家によってなされるものとされていたことを考えると、そのあり方は先駆的であった。西川先生の共同研究には、学生や市井の人々、研究者が隔てなく参加し、そこから学び合うという有り様がある。両者が共有する場から学問的な営みを発想していこうとする姿勢である。

西川所長時代の大きな仕事の一つに鶴見和子文庫関係の共同研究があるが、このインタビューの中で鶴見文庫の価値に気が付いた時のエピソードを話されている。

学生と中野卓の『明治四十三年京都：ある商家の若妻の日記』を読んだときのことであった。図書館で借りてきた本なのに、学生がもってきたその本には赤い線がいっぱい引いてあった。まさか図書館の本に書き込みをしたのではないかと、「どうしたの？これ」と訊いたところ、「いや、先生、前から引いてありました」ということだった。そこで調べたところ、それが鶴見文庫の本であり、赤い線は鶴見和子本人の線引き、書き込みであることがわかった。鶴見文庫から和子の思想的営為を読み取ることができるのではと、気づいたきっかけである。

これなど、たまたまその発見に学生がかかわっただけというふうに見えるかもしれないが、それは違う。そこには、西川先生がモノコトを介在させながら学生たちとフラットな関係の中で問題を立ち上げる試みが通底している。このエピソードもその一端として理解すべきだ。西川先生は、共同研究は「よい読者と熱心な聴衆にめぐまれることが不可欠」だと考えていらしたし、その関係を築くための手間を惜しむこともしなかった。上記のシンポジウムの準備のためにも、学生たちと週2回のランチタイムワークショップを続けたが、それは学生グループとの共催での映画の上映会という研究を超えた稔りにも結びついている。

ニュータウンに関する一連の共同研究においても、ゼミ学生とフィールドワークをする

中でご自身の研究を深めていった経緯がある。授業の中でニュータウンの「絵はがきづくり」を実施し、展覧会を開くといった活動の中で、学生から向島ニュータウンや榎島グリーンタウンのことを多く学んだという。「私はニュータウンのことを何もしなかった。ほんとうに学生はよきインフォーマントだ」とおっしゃっている。

このインタビューをしながら、西川先生の学問が具体的で柔らかな皮膚感覚をともなっているのは、その立ち上がる現場がそのようなものだからだと、あらためて気づかされた。ただ同時に、その柔らかな立ち居振る舞いの中にゆるぎない強い芯があることも見逃してはならない。先生のお人柄そのものだと思う。

20 年間の指導

佐藤 量

広島修道大学人文学部准教授、
立命館大学生存学研究所客員研究員

私は2003年から2005年までの間、祐子先生を指導教官として京都文教大学大学院文化人類学研究科に在籍していました。修士課程を修了した時、「私はもうあなたの指導教官ではない。同じ研究者」と言われましたが、以来20年間、留学、博士課程への進学、単著の刊行、就職、そして鶴見和子文庫科研に至るまで、私にとっては常に指導教官でした。

大学院に入ったとき、インタビューなんて向いてないと思っていた私に対して、祐子先生は頭を抱えていました。「今ここで電話しなさい」と、初めてインタビューのアポイントメントを取ったのは祐子先生の研究室からでした。電話のかけ方、手紙の書き方、インタビューの技法、テープおこしやデータ管理のやり方、質的データの分析方法など、今につながる私の研究手法はこの研究室で学びました。

2004年に私が中国に短期留学している時、祐子先生と長夫先生がご夫婦で大連に来られました。祐子先生の希望で旧日本人住宅を見るために街を歩き、かつての植民地都市を案内しました。現在の中国の住人によって住みこなされている様子を見ながら植民地と戦後社会のつながりについて話したことは、私の研究テーマを決定づける機会となりました。

修士論文を仕上げたのは、浄土寺の西川家でした。当時京都市左京区の私の家から祐子先生の家は近く、原稿を書いては西川家で添削してもらい、真っ赤になった原稿を手にかに戻ってまた書き直す、の繰り返しでした。修論提出間際には西川家に缶詰状態で執筆し、食事を出してもらいながら修論を仕上げたことを鮮明に覚えています。今振り返っても、もっとも過酷で手厚い論文指導でした。

立命館大学の博士課程に進学した私の指導教官は長夫先生でした。西川家には研究会などで度々訪れていましたが、そこで祐子先生と研究の話をするとみるみる雲行きが怪しくなり、「読書量が圧倒的に足りない、もっと読みなさい」と、本棚から次々に本を貸してもらいました。いつも最後には「もう私は指導教官ではないのに」と言う姿を見て、長夫先生はニコニコ笑っていました。

2018年から鶴見和子文庫科研の分担者として一緒に活動できたことはうれしかったです。相変わらずたくさんの指導を受けながら報告原稿をまとめ、共著の執筆者に名前を連ねられたことは、少しは恩返しになったかなと思っています。

修士時代からマイペースな私に対して粘り強く接していただいたことで、私は祐子先生から研究を続けることの大切さを学び、長い時間をかけて研究者にさせていただいたと感じています。今では私も教える立場になりましたが、祐子先生に教わったことを次の世代に伝えていきたいと思います。ありがとうございました。

祐子さんのリュック

篠原 聡子

日本女子大学学長／建築デザイン学部教授

1998年の11月頃であったと思います。西川祐子さんとは、私の設計したワンルームマンションに興味を持たれて、そのマンションの最寄り駅、JRの千葉駅の改札の前でお目にかかったのが最初でした。もともとは、私の夫・隈研吾と祐子さんが民博の研究会で出会い、当時祐子さんがワンルームマンションに興味をもっていることを話題にされて、それならうちの妻が設計してますよ、ということで私を紹介したのでした。おまけに、その単身者居住の研究を担当した当時の卒論生は、祐子さんの恩師である桑原武夫氏のお孫さんであったという奇遇もあり、不思議な縁に引き寄せられた出会いでした。その時に案内した「アペルト」という集合住宅について、ご著書（『住まいと家族をめぐる物語』）の中で「個室の鉄筋コンクリートの壁にアルミパンチング・スクリーンをはめ込むことによって、光の移ろう軽快さと半透明の不思議感覚をかもし出し、『隔離』と『接続』の微妙な関係を演出している。ここでは、『接続』というキーワードが重要となる。」と解説してくれました。当時の私にとっては、ワンルームマンションのような単身者居住の器がどのように「接続」と「隔離」の両義性を獲得できるかをあの手この手で試行錯誤していた頃でした。そのようなときに、分野の異なる著名な研究者である西川祐子さんにそのように興味をもっていただけたことは自分にとって大変、幸せなことでした。

初対面の祐子さんは、穏やかな雰囲気ながら、リュックを背負って千葉まできてしまう、並々ならぬ好奇心をまもっているように見えました。その好奇心は、いつしか、私にも伝染したようで、科研の「ニュータウン研究」にお声をかけていただいて以来、本当に色々な場所にご一緒させていただきました。静かに冷静に、冷徹といいっていいような観察と分析には、しばしばハッとさせられました。

クライアントとしての祐子さんにも同じようなハッとするような冷静さを感じることがありました。祐子さんは京都の路地の奥の長屋を改修した住居に住んでおられて、退職を控えて書庫兼研究室をつくるために隣接した敷地を購入され、私にその設計を依頼されました。今回のこの原稿を書くにあたって、メールをさかのぼると、祐子さんからのこの書庫について設計への注文のメモがでてきました。自らと夫である西川長夫氏の残りの時間を計算し、体力の衰えに対して、どのように最後まで、「接続」を保ち仕事を続けるか、それが叶う空間をつくってほしいという要望を出されました。30年以上、設計者として仕事してきましたが、祐子さんのようなクライアントには出会ったことがありませんでした。それでも、祐子さん、長夫さんとのものづくりは楽しいものでした。私たちの提案にいちいち、わくわくとしてくれて、竣工後もこの書庫を楽しんでくれました。「ここに座していると、連続した欄間から月が動いていくのがみえるのよ」と言っておられたのを思い出します。建築家冥利に尽きる仕事でした。

最近、私もリュックを背負って、大学や調査地に参ります。私は現職についてからも、前ほどではありませんが、設計も調査も続けております。リュックを背負って歩いていると、祐子さんのリュックには、どれだけたくさんの好奇心が詰まっていたのだろうと時々、思うのです。

「まち」の中で育んだ果てしない夢

治郎丸 慶子

社会福祉法人まちスウィング理事長

西川先生を一番に思い出しますのは「リュックサックを背負った後ろ姿」でした。私のずっと前をさっそうと歩いておられ、高蔵寺の人や風景を見て私のまちの未来を案じて下さいました。コロナを挟み、京都に出かけなかった事をこんなにも悔やみ、深い喪失感を持つとは後悔ばかり残っています。出会った頃、先生は不出来な私を照らし、「あなたはそれでいいのよ」と笑いました。そこから果てしない夢が始まったように思います。

西川先生の高蔵寺ニュータウンの研究の中で、「ニュータウンの記憶のゆくえ」という論文があります。私たちが、まちづくりにどう取り組んだかを詳細に書いてくださり、実は、障がいのある我が子の人生に何とか光りを照らそうと、必死になっていた私のエネルギーだと見事に言い当て、それがまちの為になったのだと言ってくださった記録でした。この子が育つまちが優しければ、楽しければ、強ければと考え[高蔵寺ニュータウンをライフタウンに]するため、ここで暮らす人やまちのために仕事しよう！と考えました。共生より、(多世代)融合の社会を作りたいと強く願い、「高蔵寺をベットタウンからライフタウンへ」がこの時のまちづくりのテーマとなりました。それを大切なまちのキーワードだとはっきり伝えて下さり、障がいのある子ども達の取り組みとして行ってきたことが、いつしか家族のため、仲間のため、ここに住まう全ての人のためと思うようになり、私の生きる道が、重いものから軽やかで果てしない夢に向かって行けることになったのです。

私のこれから考えている事を「聞かせて」と先生はよく言われました。そしてあるとき、「生活とかたち」を追求した生活学会の主催する吉阪隆正賞に推薦して下さいました。「あなたの生きる力と行動力を知ってもらう時」と伝えて下さいましたが、建築のこともわからず、ただ虫の目で勝手にまちを構想していた私には大それた賞だと知りながらも、先生のようにリュックサックを背負い、新しい世界と道を歩けばライフタウンが見えてくるはず、と考えていけたことを感謝しきれずにあります。もっともっと聞いて頂きたかったといつまでも名残惜しく、先生の記憶を辿っています。

西川祐子さんの思い出

杉本 星子

京都文教大学総合社会学部教授

祐子さんは、優しくて厳しくてちょっとお茶目で頑固でした。そういうところ、ぜんぶ大好きでした。あれは、いつのことだったか。電話で話しているうち、なにか意見が合わなくて、いつになく強い言葉で思うところを言い合ったあとに、わたしが「あ～も～、喧嘩しちゃったよ～！」と声をあげたら祐子さんが噴き出して。それからひとしきり二人で笑いころげたのでした。そんな風に、わたしはいつも祐子さんに甘えさせていただいて、ほんとに幸せでした。ありがとうございました。

祐子さんと一緒に、日高六郎さんのお宅に伺って、鶴見和子さんとの思い出をインタビューさせていただいたことがありました。待ち合わせ場所であるマンションの入り口にいくと、祐子さんの隣に長夫先生が立っておられます。「あっ、長夫先生もご一緒してくださいませんか」といったら、祐子さんがちょっといたずらっ子のように笑って、「今日、長夫さんの役割は、奥さまのお話し相手なの」とすましておっしゃるのです。きょとんとする私をみて、長夫先生はニコニコしておられます。えっ、まあ、ともかく行きましょうということで、さっそく三人でマンションの上階に上がり、日高さんご夫妻にお会いしたのでした。日高さんはご高齢とはいえ、ダンディーでやさしい声でお話をなさる方でした。奥さまは若々しくてあでやかな方でした。

書斎でのインタビューは一時間以上におよびました。鶴見和子さんとの出会いはという問いに、即、「敗戦直後」というお返事。終戦ではなく敗戦なんだと、ちょっとびっくりしたのですが、まさにその「敗戦」と「占領下」がキーワードとなるインタビューでした。ずばずば質問し、ぜったい脱線させず、「そこが聞きたかったんです」と畳み込む祐子さん。わたしは横でうなずいているだけで、ワクワクしながらもっぱら聞き役に回っていました。お話は敗戦後の知識人とマルキシズム、「思想の科学」の創刊から生活綴り方運動、そして内発的發展論と近代化論へと多岐にわたりました。その間、ときどき隣室で長夫先生が奥さまと談笑しておられる声がもれ聞こえました。こうして、祐子さんと私は日高さんからじっくりとお話をうかがったのでした。

そのずっと後、水俣で、鶴見さんや日高さんがよく漁村を訪れておられた時代のお話を、当時、学生として水俣病被害者の支援活動をしておられた方にうかがっていたときのこと。その後、水俣の相思社の重鎮となられたその方が、「そういえばあの頃、活動資金がなくなるとすぐ日高さんに電話したなあ」とつぶやいて苦笑されました。そのとたん、日高邸でのインタビューのあとお茶をいただきながら雑談をしていて、話しが水俣におよんだときに、奥さまが語気を強めて「あなたは甘いよ」と日高さんをきつとにらまれ、日高さんが気まずそうに首をすくめられたのは、そして祐子さんが長夫さんに同行をお願いしたのは、このあたりに理由があったのかとストンと腑に落ちたのでした。

それにしても、あの西川長夫先生にお守り役をさせてしまうなんて、と、あらためて仲睦まじかったお二人のようすをあれこれ思い出します。祐子さんはさっさと長夫先生のところへ行ってしまうされました。涙をこらえつつ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

西川祐子先生との思い出

鈴木（上垣）みちえ
大谷大学事務職員

西川祐子先生に対する私の思いは、一言で表すと「すごい研究者である」ということです。在学時、いろいろと先生の研究に触れさせていただきました。西川先生が、データから導き出される理論については、その発想力・着眼点、そして表現も私などには到底気づきもできないものでしたので、研究者となるには、これほどの才能が必要なのだといつも思っていました。修士課程で研究を終了し、博士課程へ進まなかったのは、西川先生ほどの才能が自分にはなく、研究者としてやっていけるはずはないという思いからでもありました。

ただ、大学院修了後も、まったく離れてしまったわけではなく、関心分野の論文などは読んでおりました。もちろん、西川先生の論文や著書などは拝見させていただいておりました。特に『古都の占領：生活史からみる京都 1945—1952』は、丁寧に史資料を読み解き、地図を作成し、インタビューを重ね、そこから当時の京都の様子を鮮明に浮かび上がらせる手法が、西川先生のお仕事だなあと深く感じました。鳥の目と虫の目が必要。在学時に触れさせていただいていた先生の研究手法そのものでした。丁寧に資料を集め、分析し、導き出されるものを的確な表現で表す。研究方法としては当たり前のことかもしれませんが、それがとても美しく、はっとさせられる。大きな気づきを得られる。目からうろこが落ちる。そのことが鮮やかによみがえりました。そして、この先生に指導してもらったのだという誇りを感じました。研究というものの素晴らしさを感じました。

2年間という短い期間でしたが、研究の仕方をイチから教えていただき、研究というものについて、わずかかもしれませんが、理解できたのではないかと感じております。西川先生にご指導いただいたおかげだと思えます。現在、私は他大学で研究支援の仕事をしております。この修士課程の2年間の経験により、研究者の考え方、研究にまつわる細々としたことなどについて、前提条件を同じくして、本学の研究者に対応できているのではないかと自負しております。文系私立大学ですので、昨今言われている「役に立つ研究」に対する鬱屈感があり、話題となります。「役に立つ研究」とは何か。そう簡単に答えが出るものではないことは重々承知の上ですが、「はっとさせられ、大きな気づきを得られる」。それが一番重要なのではないかと感じています。

西川先生には、大学院修了後も気にかけていただきました。結婚相手も元々西川先生にお世話になっていた人であったので、子どもを出産した際も、我が家の近くに住んでおられるお知り合いの方を「何かあったら頼る相手」としてご紹介いただきました。

頻繁にお会いする機会はありませんでしたが、教え子として十分な愛情をいただいたと感謝しております。

西川祐子先生との思い出

高石 浩一

京都文教大学臨床心理学部教授

私が京都文教大学に着任したのは大学が設置された初年度、1996年の4月であった。当時、大学には人間学部しかなく、臨床心理学科と文化人類学科の2学科が一緒に教授会を行っていた。誰しもが若く、新鮮な大学で活気ある議論が果てしなく行われていた。そんな中で、独特の落ち着いた空気感を漂わせながら、粘り強い議論を戦わせていたのが西川先生であったと記憶している。

もはや知る人も少ないので、あえて記しておきたいのだが、本学設立にあたって当時の副学長であった後藤晨次先生は、文化人類学と臨床心理学、そして女性学（ジェンダー論）という3学科体制を目論んでいたという。もともと京都アスニー（京都市生涯学習総合センター）所長であった後藤先生は、人権派の研究者、実践家であり、西川祐子先生と荻野美穂先生にその願いを託した。結果的に3学科体制は実現せず、両先生はそれぞれ文化人類学科と臨床心理学科に配属されることになった詳細な経緯は知らないが、それでも両学科にとって西川先生と荻野先生は、貴重な存在であったと思う。

西川先生と直接の知遇を得たのは『共同研究 男性論』執筆のきっかけとなった研究会を通してである。もともと異文化に興味を持っていた筆者にとって文化人類学科の先生方との共同研究は刺激に満ちたものであったが、筆者の長年の研究課題、母娘関係の研究テーマを通して開かれたジェンダー論への興味は、さらに刺激的だった。西川先生、荻野先生の鋭い指摘は、今までに体験したことのない全身を削られるような学問的興奮を感じさせるものだった（『男性論』の初稿は、院生当時のように真っ赤に朱が入れられて戻ってきた）。当時の研究会は本当に刺激的で、とりわけ西川先生は柔らかい言葉で毅然とした芯の通った議論を展開され、いつもひりひりとした緊張感と同時に、包み込むような受容的雰囲気を併せ持っていた。今思うとそれは西川先生ご自身が身にまとうておられた空気感であった。

その後も学科の名称は変化したけど、一貫して西川先生が主催する共同研究に参画させて頂き、アカデミズムの何たるかを肌で感じさせていただいた。それは個々の研究者が幅広く深い文化的素養を基盤にして専門性の高い研究を行うのみならず、そうした背景を持つ多領域の研究者同士の相互作用によって、さらに深みと広がりが増すという体験であり、相互の知恵や知識に対する畏敬の念を決して忘れない、ということでもある。そうした研究会のお仲間に加えて頂いたことが、西川祐子先生との一番の思い出である。

コロナもあって、最近は研究会にもオンラインで参加されることが増えた先生、直接お会いできる機会があればと念じていたのだが、突然の訃報に腰が抜けた。また機会を逃してしまった…と、後悔することしきりである。願わくば彼岸の研究会にもまた、お誘い頂けることを心から願っている。本当にお疲れ様でした。

西川祐子先生と長夫先生の学恩

高木 博志

京都大学人文科学研究所教授

中高生の頃から、私はスタンダール、バルザックなどを読んでいたので、ロシア文学かフランス文学を勉強したいと思っていました。亡父は、戦後すぐに仏文を専攻しスタンダールの『赤と黒』が卒論でした。父は大学に行かずに畑で食料をつくり、橋本遊廓に出入りしていたことも死後にわかりショックでした。そのことを私がのちに話しますと、祐子先生は敗戦後の京大仏文にはそんな学生が多かったと穏やかにおっしゃいました。1979年に立命館大学日本史学専攻に入学した私は、長夫先生の追っかけで、『ミラノの人スタンダール』（小学館、1981年）、『フランスの近代とボナパルティズム』（岩波書店、1984年）、『日本の戦後小説－廃墟の光』（岩波書店、1988年）の作品ごとの、立命館大学人文科学研究所の小さな研究会に出入りしていました。「人は自分が愛するものについてはいつもうまく語れない」というロラン・バルトの引用もよく覚えています。

祐子先生は長夫先生が亡くなってからお目にかかることが多くなり、遅ればせながら作品を読ませていただきました。『花の妹：岸田俊子伝』（新潮社、1986年）、『私語り樋口一葉』（リブレポート、1992年）の時代と向き合った評伝、生活の居住空間からの思想など。それらは、祐子先生の独自の世界、歴史の感覚として、私にはとても自然に納得できるものにして、社会科学的志向もある長夫先生とはまた違った学びをいただきました。光あふれる書齋でさまざまなことをワインとともにうかがいました。桑原武夫先生を尊敬しながらも長夫先生ともどもフランスを相対化する、師とは違う視点。京都にパン屋さんが多いのは、宣教師婦人にまなんだ戦前の同志社女学校の卒業生が開店したのが契機との親戚からの聞き取り。私が飛鳥井雅道先生から直接教示を受けたこと、そして京大人文研で活動できたことを喜んでくださり、飛鳥井家と西川家が吉田山の反対側から子供たちをつれて頂上で落ちあった昔の逸話もうかがいました（長夫先生は、若き日の飛鳥井先生を「ああランボーだ」と思ったとのことです）。リクオさんのCDもいただきました。『古都の占領：生活史からみる京都 1945—1952』（平凡社、2017年）について、ご自身の経験としてこれだけは書かねばならないとおっしゃり、歴史研究者が学ばねばならないこととして、聞き取りや地図の空間把握に加えて、GHQ文書から京都府庁文書、雑誌・新聞などまでの史料を博搜し、人々の生活をイメージ豊かに描かれました。『人間喜劇 総序・金色の眼の娘』（岩波文庫、2024年）を読み終えて、私には解説を読まなければクライマックスの意味も理解できなかったのですが、祐子先生の日本研究の根っこにはバルザックがあり、円環して遺著となったことに感銘を受けました。

2003 年 4 月 9 日水曜日

立石 尚史

京都文教大学事務局研究支援オフィス職員

京都文教大学が開学して最初の学生となった私は全学共通科目だった西川祐子先生の「文学」を受講しました。講義の終盤で、様々なタイプの住まいを舞台にした短編物語を書くという課題が出たのですが、受講生全員の作品をひとつの物語としてつなぎ、冊子の形にまとめる役を誰かやってみませんかと西川先生が募ったのです。私は単純な好奇心により、ひとり手を挙げてその作業を引き受けたのですが、それがきっかけとなって西川先生からはその後もいろいろなお手伝いを頼まれるようになりました。所属学科も違う学生だった私が、まさかそのあと四半世紀以上にわたり西川先生の折々のお仕事に感化され続け、数え切れないほどたくさんのお茶とお菓子と談笑の時間を共にさせていただき、そして人生の岐路にはいつも親身にご助言をいただいて、こうして胸をつまらせながら追悼の文章を綴ることになるとは、あの日の「文学」の授業で手を挙げた 1 年次生の頃の私には想像もできなかったわけです。

幾多の、ほんとうにたくさんあるはずの思い出のなかで、この機会に際して強く心に浮かぶ先生のある日の姿があります。それは 2003 年 4 月 9 日水曜日のことで、なぜその日付を示せるのかというと、当時の私はその時のことをメモに残していたからです。いつものように研究室を訪れたら、西川先生の表情からは「静かな憤り」がうかがえたのです。

先生は私に新聞記事を差し出しました。そこには「アメリカはイラク戦争後の統治政策を“日本モデル”で行う」という旨が書かれていました。アメリカ政府が第二次世界大戦後の日本占領を「成功例」と見なしていることが示されるこの事象について、このとき西川先生は長い時間をかけて止めどなく話をされたのでした。その語りの奥にあった強い問題意識をそのときはまだ見通すことができず、ただその勢いに圧倒されただけの私のメモには、かろうじて「アメリカの言っていることの二項対立のからくりやワナを理論的に言っていかなければならない、それが課題だ」という先生の言葉だけが書き残されています。

それから 14 年後に西川先生は『古都の占領：生活史からみる京都 1945—1952』（平凡社）を書きあげられます。この本では先生ご自身の人生も重ね合わせた市井の人々の立ち位置から、戦争とそれがもたらす厄災への憤怒と、そして現代にまで通底する政治的計略に対する批判意識が全身全霊で示されているといえます。私にとってはあの日の先生の「止めどない語り」の続きが、この本という形となって残されたのだと受け止めています。

追悼文としては、いつも和やかな笑顔の、優雅で穏やかな西川先生の姿をたくさん書いておきたい気持ちがある一方で、何よりも先生には「ことば」を携えて闘い続けた研究者として、ときに専門分野の枠も越えて「問い」に向き合いながら、広く読み手に届けるための文章を書き刻み続けておられたことへの心からの敬慕の念を覚えずにはられません。

西川先生と出会えて、お仕事的一端を微力ながら支えさせていただけたことを私はずっと誇りに思っています。どうかこれからも見守っててください。

彼女の「うつわ」の物語

田中 智子

京都大学大学院教育学研究科教授

それははなはだ奇妙な、忘れ得ぬ仕事であった。2018年から翌年にかけてのこと。「女性民権運動の先駆者」・岸田俊子の評伝復刊をお手伝いする機会に恵まれた。小説仕立ての本書を、付注によって学術書へとリメイクする。執拗に典拠を探し定める自らの作業と、その傍らをすり抜けていく祐子さんの思考回路と行動様式。その関係を、解説の拙文にて『黒蜥蜴』になぞらえた。「黒蜥蜴にされちゃったわよ」とまんざらでもない笑みを浮かべたご本人は、およそそんな柄ではない方だったが、その手の編み出す歴史上の女性像は、俊子のほかに樋口一葉・高群逸枝・石牟礼道子——とくれば、緑川夫人も好物の範疇か。

本物のトカゲでも出てきそうな谷あいの西川邸、書庫兼書斎の資料の山。お目当てのありかを見失い、あれあれと掻き分ける「谷の家の巫女」。巫女や黒蜥蜴の神秘性からはほど遠く、日常性と社交性を持ち合わせた編み手でいらしたけれど。公私の垣根が低く、研究者・編集者・市井の人々を巻き込んでゆく。

歴史の事実とは、想像を制約するものではなく、むしろ想像をはばたかせるもの、と教えてくれた。その産物としての「歴史小説」（うっかり「時代小説」と呼ぶと、いちいち訂正されるのだ）は、時代の変わり目を描くバルザックや大佛次郎の精神に通じる。歴史学者同様の熱量で史料を集め、しかし学界の作法もなんのその、対象ごとに選び貫かれる自分だけの歴史叙述法。そして、学術論文よりも読者を広く獲得する。

『花の妹』あとがきは、「なつかしい方々との再会、新しい読者との出会いと対話が生まれることを願いながら」と締めくくられる。「読者」の存在が前提であり、よき理解者もふと現われる。この復刊を、過去の名曲を新世代のミュージシャンと現代音楽に再構成すると喩えてくれる便りをもらうなんて。眼前に繰り広げられるのは、本来の私が志向する歴史との付き合い方なのかも。いいなあ……足元と気持ちがぐらり揺らぐ。

自転車郵便受けに原稿を入れて、病院予約を避けて約束を入れて、執筆秘話を耳にサンドイッチをおなかに入れて、資料は衣装ケースに入れて、次のお客さんも中に入れて。あの「うつわ」でのお手製共同研究を経て、私に託された仕事は、行方をくらましたあの史料の所在を突き止めることか。かつて祐子さんが大磯に捜し当てた俊子の日記。名探偵ぶりを発揮して、今度こそひれ伏させてみたい。そうしていれば、歴史をどう書くの？という謎かけの答えも見つかるだろうか。

岸田俊子は、一時職場としたフェリス女学院にはなじまない個性の持ち主だったと思う。しかし、学院歴史資料館に、祐子さんの集めた膨大な俊子関係資料を、作業メモまで丸ごと寄贈することができた。祐子さんのまなざしや手つきはきっと、歴史と文学を愛する永遠の少女たちと相性がよいはず。いつの日にかまた、素敵な出会いが生まれますように。

「けなるい」遠望

鶴見 太郎

早稲田大学文学学術院教授

一九九六年、院生気分が抜けきらないまま、京都文教大学に助手として赴任した私にとって、西川先生の文学の講義はできれば聴講したいと思う科目でした。開学一年目ということもあり、確か相互に教員が講義を聞くという風景もあったと思うのですが、憚りの方が先行して、自ら授業の場に足を運ぶことはなく、私が所属する臨床心理学科の学部生などから時折、授業のあらましを聞いたりして、京都弁で言う「けなるい」気分で、先生の講義を遠望していました。

西川先生の研究室は光暁館二階の一番奥にありました。上の階に繋がる階段近くの踊り場を基点にすると、30メートルくらいあったかと思います。先生は「私は研究室に辿り着くまでに色んな方と会うので、そのたびに挨拶しないといけないんですよ」と仰っていましたが、先生はご自身の研究室をふくめ、意思疎通を行う空間そのものを大切にしていました。

これは先生の研究を行う上での視点とも関わってきます。日本近代、そして現代文学にある、家／家庭をつくったけれども、うまくいかなかった、という主題の系譜は、先生の主著のひとつ『借家と持ち家の文学史』（三省堂 一九九八年）でも重要な支柱になっていますが、その際、先生はそこで形作られる人間関係だけでなく、家の立地条件、住み心地、時に間取りにも関心を向けており、そこに近代日本の文学を読み取る複合的な深い視野をみることができます。晩年、ともに結核を止んだ岸田俊子と中島信行が夫婦で療養生活を送る際、それを空間とともに切り取った叙述は『花の妹』（新潮社 一九八六年）の白眉ですが、まさにこの視点から生まれたものでしょう。

自分がこれから書く（話す）にあたって、どんな視点からそれを行うか、その表現の在り方について考え抜くことに先生は細心の注意をはらいました。『花の妹』の冒頭シーンが、岸田の全体像を捉える上で何から始めるべきか、京都街中の路上に立って担当のN記者（中村勝さんか）と思案する自身の姿を描き込んだことは、その象徴的な光景です。

一九九九年だったと思いますが、鴨長明が結んだ方丈庵の間取りや、家具の配置を示す図解がないかどうか、先生から相談を受けました。恐らく授業用の資料で必要だったのだと思います。幸い、朝日新聞社から出ていた『朝日百科 日本の歴史』の中世を扱った分冊に方丈庵の間取りがあったのを思い出したので、それを図書館で確認し、複写をとっていただきました。遁世したことによって、むしろ世間の細々としたことに長明の興味が広がってゆく—それを表現するための小さな空間として、先生は方丈庵に関心を持たれたのではないのでしょうか。

「けなるい」気持ちばかりで、先生の講義をついに聞くことのなかった者として、その時、わずかながらお役に立てたことに感謝します。

西川祐子さんが創る共同研究の醍醐味

中谷 文美

関西学院大学社会学部教授

西川祐子さんは何よりも共同研究の人であった、と思います。ご本人が、アカデミックキャリアの当初からそれを志したわけではないかもしれませんが。でも西川さんがこれまでの歩みの中で、そのときどきの場所で得た新たなテーマ、新たな仲間との出会いの種を決して見過ごさず、丁寧に水をやり育てた成果が、実に多彩でありながら、かつどこか一本筋の通った著作の数々に結実してきたことはまちがいないでしょう。

西川さん自身、京都文教大学での最終講義において、このように語っています。

「フランス文学を志した私がしだいに専攻分野をずらし、それぞれの時期に自分のテーマをみつけた理由を説明しようとすればできるかもしれません。でも実際には、偶然の出来事と数々の出会いがそうさせました。私たちはひとりひとり一度きりの人生の当事者ですが、すべてを自分から作るのではなく、偶然を材料にして必然をつくるのではないのでしょうか。」

京都文教大学で西川さんと出会った私が唯一一緒にできた共同研究は、その名も『共同研究 男性論』（荻野美穂と共編、1999年）として出版されました。新設されたばかりの大学で、さまざまな場所から集まってきた異分野の研究者たちが集い、ジェンダーを切り口に共同研究をしようということになったわけですが、研究会が進むにつれ、「男性」というテーマが真ん中に置かれたのです。

当時、生後数ヶ月の子どもの世話と仕事との両立に追われていた私にとって、関心を持てる対象は「子育てをする父親」くらいしかいなかったもので、それについて調べ、考えることにしました。参加者がすでに持っている手札をそのまま持ち寄るのではなく、共同研究をしたからこそ出てくる新しい発想や方法に導かれる、よき共同研究の見本みたいな経験でした。

西川さんが大切にしたい出会いの対象は、研究者だけではなく。大阪の婦人会館で2年にわたって開講した平日夜の市民講座で生徒となった女性たちとはその後も交流が続き、冊子『女たちの夜の学校／その後』（2009年）が刊行されました。初期の作品である評伝『花の妹—岸田俊子伝』（1986年）では、京都新聞での連載に反応し、情報を寄せてくれた読者のほかに、毎日の挿絵を書き手と対等な立場で提供し続けた浅野竹二さんと「たがいに遠慮なく文句をいいあう気持ちのよい緊張関係が生まれ」たそうです（『現代のことば』京都新聞 1999年3月5日）。近年の大著『古都の占領』（2017年）のあとがきには、占領期を子どもとして過ごしたかつての同級生たちと出会い直し、「調査というよりは問題をともに考えるたくさんの貴重な機会」を得たと書かれています。

いつ会ってお話しても、西川さんの口からは常に何か新しい、面白そうなテーマの構想が出てきました。そこには必ず伴走者がいて、その人たちと一緒にやることの何が面白いかを生き生きと語っておられました。

西川祐子さんという希有な研究者の歩いた道のりを、ほんの端っこであっても、また実際には時折お話を聞くだけのかかわりであっても、一緒に歩かせてもらえた感覚が持てたこと。これ以上の幸いはないと思っています。

西川祐子さまへ——先生のしかけとたねあかし

中林（浦井）基子

武蔵大学大学院人文科学研究科博士後期課程
ケアマネウイズだいこんの花・主任介護支援専門員

初めて西川研究室の扉をノックしたのは、大学院の入学式から1週間後のことでした。

先生は、まるで今日ここに私が来ることを知っていたように「そろそろ来る頃だと思ってました」と笑って、紅茶とクッキーをお皿にならべて「さあ、あなたが使うカップを決めましょうね」と、迎え入れてくださいました。

西川先生のレッスンは、いつもいろいろな人を巻き込みながら、思いもよらない仕掛けに満ちていました。先生がライフワークで通われていた健光園での回想法と一緒に参加し、若い頃に仲居をしていた入居者の女性が語ってくれた約55年前の記憶、彼女の19歳頃の記憶をたどり、そこに見えている昔の風景を聴き、55年後に生きる当時23歳の私の目に映しながら、京都の町を先生と一緒に歩きました。またゼミでは、20世紀初頭に商家で書かれた家政の記録を英語に翻訳した“Makiko's Diary”を、21世紀初頭の社会に暮らす大学院生としての私たちが再び日本語に翻訳して感想を添えて手紙を送り、アメリカで暮らしていた翻訳者のKazuko Smithさんからお返事をいただいたこともあります。先生は、時間と空間を軽々と超えて見せて、終わりにいつも種明かしをしてくれました。

修士修了の際、ホームヘルパーの仕事をしながら自分が何を見たいのか考えると言った私に、先生は、「修士を終えて介護の現場に入ったあなたが、何を見て、何を考え、どんな本を書くのか。わたしをあなたの本の最初の読者にしてね」と仰って、先生と私は約束しました。介護の仕事や家族の介護で疲れ果てていた時、西川先生から時おり届く便りは、いつも私を気遣うものでした。安否をたずねるメールに折り返し電話をすると、いつでも書くことを諦めないように、やさしく、厳しく、励まし、叱り、そばにいてもいなくても、いつもいろいろと質問をしながら、終わりには「約束よ」と言って、私を導いてくださいました。

最後のレッスンになった日、その約束を、先生のたくさんの本がある書庫で、もう一度しました。先生は、「わたしはあなたと同じように考えていた人をよく知っている。それはそうで、わたしの研究はバルザック研究から始まったんですから。あなたの自分史の文章を初めて読んだ時、あなたが自分の目で見たと自分が見たように書きたいと言った時、わたしはあなたが18世紀のバルザックと同じ眼で社会を記録したいのだと理解した。『総序』をあなたに送るから、あなたは、その続きを現在の日本で書いて、『泣き虫基子の成長記録』をわたしに読ませてね。書くことでしか自分の言葉は見つからない。書いて書いて書きまくりなさい」と仰いました。

麦子さんと陸男さんから先生の『「人間喜劇」総序・金色の眼の娘』が届きました。初めて自分史を西川先生に読んでもらったあの日、先生が仰った「たくさんの人の物語りを聴いて、見て、書いて、大きな1つの風景のような本」にして、先生に必ず届けたいと思います。ありがとうございました。

西川祐子先生を偲ぶ

橋本 和也

京都文教大学名誉教授

1996年4月京都文教大学人間学部文化人類学科開設時には個性あふれる面々が普照館の2階に集まっていました。私の部屋の右隣の方にアフリカ研究者の日野舜也さん、そして左隣に西川祐子さんの研究室がありました。実は西川さんの娘・麦子さんとは大学院が同じで、私についてどのような話が伝わっているのか怖くて一度も直接質問したことはありませんでしたが、なんとなく近づきがたい存在となっていました。そういうわけでお会いする前から親しみをもっておりましたが、もう一歩踏み込んでいくことがはばかられました。西川さんの授業科目は文学、ジェンダーと文化で、研究テーマとしては近・現代の家族、特別老人ホームでの回想療法やライフヒストリーの聞き取りなど、当時から先端的な取り組みを精力的に行っておられ、学内でも感化されて共同で研究する先生方も沢山おられました。私は研究地域がオセアニアで、1年次の開発人類学、2年次の観光人類学を担当し、研究分野が観光とスポーツ、そしてキリスト教ということで、西川さんとは研究で重なることが少なく、共同研究で一緒にする機会がありませんでした。

いま思い出すと、西川さんのお顔を拝見すると大変急いでいるのかなと察せられるのですが、はた目からは動きがなんとなくゆっくりとしているように見えて、本当はどちらなのだろうか、と思える姿を何度も拝見しました。西川さんは、優しくてとことん粘り強い方であったと思います。以前ある方から、とある大学を相手に訴訟で粘り強く闘っていたとの話を聞いたことがあります。本大学でも不利な立場の人に寄り添いながら粘り強い交渉をしていた姿を思い出します。味方としてこれほど頼りになり、有り難い存在はいないと信じておりました。大学院生の指導においても同様で、一度出た結論に対しても簡単には納得せず、さらに検討すべき問題点を探り当てようと考えつく限りの疑問点を絞り出していた姿が思い浮かびます。西川先生を指導教員とした院生は粘り強く考える力がつき、いまでも問題に取り組んでいると思います。

ご冥福をお祈りいたします。

人がつながる家、光が差し込む書庫

番匠 健一

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所研究員

私は立命館大学で西川長夫さんのもとで勉強していました。『近代国家と家族モデル』や『住まいと家族をめぐる物語』などの著作は読んでいましたが、祐子さんと直接お会いしたのは2005年の正月に浄土寺のお宅に新年の挨拶に伺った時です。まだ家のリフォームの前で、階段がきしみ二階もほどよく傾いた暖かみのある家でした。時間をかけたお正月料理をごちそうしていただきましたが、祐子さんのいる一階のキッチンと院生や研究者仲間があつまる二階の部屋とは距離があり、祐子さんの人柄にふれるのはもう少し後でした。

自宅に併設した書庫ができたとき、ガラス壁で採光のとれた建物になっていて本の日焼けは大丈夫なんですかと聞いたところ、人があつまるところにあって読まれてこそ本は生きると話されていました。また建築家の方たちとの交流から、高齢者の家を古くて誰も来ない場所にしない工夫をととても考え、実践されました。実際、祐子さんの家には、熱帯魚の水替えや掃除のお手伝いに来る学生たち、友人たちや若者がよく出入りしていて、交流の場になっていました。ピアノと立体的な本棚に囲まれたテーブルで頂いた紅茶とお菓子、祐子さんの料理の味を覚えている人は少なくないと思います。

住宅については向島の団地の共同研究もされていましたが、『借家と持ち家の文学史』現代編の追加をだいぶ前から考えておられたようで、私が西陣織の女工の寮で一階が天理教の教会になっていた建物を借りてシェアハウスをしていたことにとっても関心を持っておられました。私自身は、変わった個人が集まった居住空間と自由に出入りできるフリースペースのつもりでしたが、祐子さんは若者の共同生活を面白そうに見ながら、その向こうに生命再生産の問題を見ていたように思います。天理教の女性の労働時間や掃除と身体規律の関係、吉村公三郎監督の映画などの話をしましたが、若者の流動的な共同性のなかに出産や育児をどう工夫するのかという問いが会話の裏側でこっそりと差し出されていた気がします。

東日本大震災の翌年、西川長夫さん祐子さんとドライバーの私で東北をまわる機会がありました。仙台から入り、石巻、女川、南三陸、気仙沼と2人の息子の陸男（Rikuo）さんが演奏の旅でつながった地元の人たちを線で繋いでいくように、三陸海岸を少しずつ北に向いました。

2013年に長夫さんが亡くなってから、長夫さんが単著として企画していた『戦後史再考』をゆかりの研究者で引き継ぎ、祐子さんと共同研究会をする機会ができました。普段のお話の端々に感じる歴史のディテールへのこだわり、議論するときの言葉にやどる具体性、資料調査とインタビューを独自の感性で徹底的にやる熱量に、研究者として圧倒されました。私が戦後史をタイトルにした本で山田洋次の映画『家族』をとり上げることを喜んでくださり、その後同監督の『小さいうち』をめぐる議論したことも覚えています。本と資料で埋まった北白川のマンションの長夫さんの職場を、3年以上かけて祐子さんと二人で片づけました。長夫さんの後片づけを手伝う時に、浄土寺の寺はいろんな人に手伝ってもらって成り立っていて、そこに加わってほしいとお誘いを受けたことを覚えています。家や家族は閉じたものではないのだと、改めて気づかされました。浄土寺の家の長夫さん

の本と資料は、さらに3年くらいかかりましたが、毎週1、2度くらい祐子さんと作業をしてお茶を飲みながら話すことが楽しみでした。

『古都の占領』は執筆過程で祐子さんの記憶と資料を照らし合わせる作業を少し手伝わせていただきました。私は京都文化博物館で古い日本映画を見るのが好きだったので、祐子さんとよく映画の話をしていました。プレスコードをかいくぐりながら映画に映り込んでいる占領の痕跡を探して、隠れた名作を見つけ喜んでいました。祐子さんと息子の陸男さん、ドイツ文学の佐藤方代さんの4人で『風立ちぬ』を見に行って、夕食を食べながら議論したことも思い出深いです。『古都の占領』は章ごとに思い出がありますが、占領期の京都を舞台に無数の人々がいろんな場所で交差して、別れてまた出会って、幼い自分もそこに歩いているという本全体のイメージは、祐子さんがよく言っていたバルザックの全体小説をもとに女性史、文学研究、聞き取り調査など積み上げてきた研究をすべて活用したものだと感じました。子どもの祐子さんが訪れた櫻谷文庫（進駐軍のクルーガー図書館が一時期あった）は、私の子どもが保育園で芋ほりに行く場所になっています。私にとって、西川長夫さんが知的好奇心と世界に向き合う態度で最も刺激を受けた人であるとするなら、祐子さんは生きることについて最も影響を受けた人です。

アーカイブズ利用者としての西川さん

福島 幸宏

慶應義塾大学文学部准教授

西川さんとはアーカイブズの利用者に対応する職員、という関係で知り合うことになった。舞台は、京都市左京区北山にあった京都府立総合資料館（現在の京都府立京都学・歴史彩館の前身）。この施設は、図書館機能・文書館機能の複合館として運営されており、筆者は歴史資料課という文書館機能（アーカイブズ）を担う課に所属し、京都府の公文書の運営を担当するチームの一員であった。

2010年ごろ、西川さんはその公文書の利用者として京都府立総合資料館にあらわれた。丁寧なご連絡をいただいた上で、面談を希望されて来館され、調査の意図を明晰に説明いただいた。1944年から1945年にかけて行われた建物疎開の関係資料が多く所蔵されている、という朝日新聞に掲載された記事をご覧になってのことだったのだろうか。この建物疎開関係資料は、個々人の財産処分に関わる資料であり、個人情報も多く含む資料であった。そのため、西川さんの希望を聞き取りながら、アーカイブズのルールにしたがって開示する情報をコントロールし、膨大な資料を少しずつ公開する、ということになった。また、占領期の各種資料にもその関心をひろげられていったが、こちらにも占領軍が起こした事故の被害者などの大量の個人情報が含まれていた。

その過程で、西川さんは利用者として厳しい要求をされるとともに、アーカイブズの職員を対等な研究仲間として扱っていただいた。日本の文化施設では、利用者が職員を対等の存在として扱わないことがままある。この論考の読者なら公立図書館のカウンターで怒鳴っている利用者に遭遇したことがあるのではないか。これは実は専門家であっても同様である。アーカイブズと親和性が高いはずの歴史研究者であっても、アーカイブズ職員を対等な相手と扱わない、という態度を示す利用者もいた。この点、西川さんは違った。ご自身の要求をはっきり伝えながらも、対等な存在、研究仲間として扱っていただいた。これらのアーカイブズ職員への対応の背景には、もちろん西川さんの人格があったのだろう。しかし、あるいはフランスでのアーカイブズ利用の経験があったのかもしれない。

この成果は、名著『古都の占領：生活史からみる京都 1945—1952』（平凡社、2017年）にまとめられた。その後、2018年1月11日に、河原町の丸善の地下のスペースで行われた京都新聞大賞受賞記念の講演会で、立命館大学の河角直美さんとともにお話相手をつとめたこと、また2018年3月15日には左京区田中のご最良のフランス料理店で歓談のひとつきを持てたことも懐かしく思い出される。また、この『古都の占領』にいたるご研究の過程で、占領期の状況を聞き取るワークショップなど様々な場でご一緒することができた。

このような西川さんとの交流の過程で、筆者自身も占領期を対象とした論考をいくつかのすることができ、思考や研究の幅を広げることができた。この占領期への関心は今も細々と繋がっている。その意味では、私も西川さんの影響を受け、人生と研究にその刻印を押された一人である。

パリで食べたカキの味と後悔

松田 凡

京都文教大学名誉教授

大学を退職して6年半になります。幸せなことに退職後も卒業生やかつての同僚の先生方、職員の方々とお会いする機会が多く、そうした場を得た後の数日間はこちらにしみじみとしたぬくもり感に浸っています。あらためて自分にとって幸せな教員生活だったことに思っていたこの頃です。西川先生の訃報を耳にしたのも、卒業生の一人と北海道旅行をしていた今年の6月のことでした。ご病気で入院中であることは聞いていましたが、それほどまでと思わず、鯨が胸に詰まりました。

2017 年末か 2018 年の冬ごろ、共同研究の集まりで先生にお会いし、私が早期退職することをお伝えすると先生は、「大学を辞めると研究の時間はたくさん取れるけれど、無所属なので図書館や資料館は使いにくくなるわね」とおっしゃったのを覚えています。ああ、この先生はどこまでも資料に基づく徹底した実証主義の人なのだと思います。先生はちょうどその年に『古都の占領：生活史から見る京都 1945—1952』を上梓され、京都新聞大賞を受賞されて話題になりましたので、まさにこのことばは実感以外の何物でもなかったのでしょうか。私自身は退職後は研究からも距離を置くことを考えていたので、先生のアドバイスに恥じ入るほかありませんでした。

考えてみれば先生と私の研究上の接点はそれほど多くなかったように思います。共同研究をご一緒させていただいたのは一度だけ、先生からはご著書を何冊もいただいたのに、私からはついぞ献呈させていただくことはできませんでした。ワイングラスを片手に議論をしたという記憶もありません。12 年間も同じ職場にいながらなぜと考えると、私は先生が怖かったのかもしれないと今にしています。もちろんあの物腰の柔らかな先生に恐怖心を抱いていたという意味ではなく、まさに畏怖の感情です。その元をたどれば、資料の山に分け入って隠れた事実を紡ぎだす実証の人である先生に対して、眼前のフィールドだけを信じて調査研究を行ってきた自分自身に負い目があったことに気づかされます。たくさんの文献や資料に囲まれながらも整然としていた先生の研究室、井上章一さん（国際日本文化研究センター）の研究資料リストが手に入ったと喜んでいらっしゃったときのうれしそうな目の輝き、そして数多くのご著書の重みとその醸し出す雰囲気を出すと、自分には達しえなかった研究者の姿を普照館 2 階の廊下の一番奥に見るのです。もっと先生から学ぶべきだったという後悔とともに。

最後に心残りをもう一つ。大学の開校後間もなく、私の初めてのパリ旅行の折に先生からガイドブックと若干のフランをいただきながら、帰国後おみやげのハンカチを渡すのをすっかり忘れていたこと。ごめんなさい。先生に教えていただいた海産物のレストラン、そこで食べたカキの味が忘れられません。

日常生活と地続きであり続けるために

森 正美

京都文教大学学長・総合社会学部教授

「祐子さん」といつも呼ばせて頂いていました。研究のこと、生活のこと、どんなことでもいつも真剣に受け止め、時に少し困ったような顔をしながら一緒に悩んでもくださいました。祐子さんとは本当にたくさんおしゃべりをしましたが、今でも、その時々言葉や表情が鮮やかに思い出されます。

ある日研究室に伺うと、良い香りがしました。私たちの研究室のすぐ裏に菩提樹の大木があって、花をいっぱいにつけることを私は知りませんでした。「いい匂いでしょ、お茶にすると美味しいの」と、フランス時代を思い出しながらまるで少女のように微笑む姿はとてもチャーミングで、オシャレで可愛らしい小物や美味しいものが大好きだった祐子さんらしい姿でした。

研究者としても、語り尽くせないほど多くのことを教えて頂きました。祐さんは一言で言えば、生活や人生と研究が一貫して地続きの方でした。『京都フィールドワークのすすめ』（2003 昭和堂）に結実した共同研究「京都論」では、共同研究の組立て、新たな視点や概念を議論を通じて紡ぐ手法、大勢の著者と書籍を完成させる方法などを体験的に学ばせて頂きました。とくに編者として、全ての原稿に手を入れ納得のいくまで著者とのコミュニケーションを厭わず、読者の受け止め方、読者への届け方を重視して作品を作り上げる作業をご一緒できたことは、今でも私の大きな財産です。

また、「ニュータウンのジェンダー研究」では、科研申請書作成から学際的共同調査・成果報告まで、一つの研究対象をチームで多角的に研究する意義と楽しさを学びました。それまでフィリピンだけを研究対象としていた私が、身近な眼前・足元のできごとを世界の状況と繋げて複眼的に捉えようとする手法にこだわるようになったのは、この時の経験があったからだと思います。

さらに子育て経験のある女性研究者の先輩としても、いくつも貴重な示唆を頂きました。まず、自宅と保育園と買い物をする場所を結ぶ三角形を最小にした方が良いという具体的なアドバイス。この助言を受けて、私はすぐに宇治市内に転居し、それ以来ずっと宇治市民です。何かあればいつでも相談できる人が近くにいる、というのは、本当に心強いものでした。

祐さんに名誉教授になって頂いてから届いたメールにこんな言葉がありました。「京都文教大学はいつまでもわが実家、向島は実家のある街です。卒業生たちとともに学園と学園のある街を誇りにしております。」「わたしが日常生活史専攻を名乗ることがあるのは、日常生活こそが政治、経済そして思想闘争の場だと思うからです。そして日常生活がやはり好きなんだ。おうちごはん大好き人間です。わたしたちみんなそうですね。あっはは（笑い）です。」

祐さんから頂いたものを全部しっかりと引き継いでいける自信はありません。でも少しずつでも積み重ねていきたい。だから、笑顔でみていてくださいね。本当にありがとうございました。

【追悼】

西川祐子先生最終講義（2008年2月13日 於 京都文教大学 指月ホール）

講演録「ことばをリレーするために ——わたしの女性史、女性学、ジェンダー研究」

【注：本稿はグループ光の領分・編『女たちの夜の学校／その後』（財団法人大阪市女性協会・クレオ大阪中央、2009年）所収の西川祐子著「幾度目からの出発」からの抜粋によるものです。本企画への転載にあたり、「グループ光の領分」の稲孝子氏にご協力を賜りましたことをここに感謝いたします】



I はじめに「つながり」について

最終講義という、けじめの日を設けてくださった京都文教大学人間学部文化人類学科の学科会に感謝いたします。この大学の創設時以来12年間、仲間に入れていただきありがとうございます。ついこの間、本年度の卒業論文発表会がありました。わた

しのゼミの学生たちも全員ぶじに発表をすませました。わたしも今日の発表が終われば、彼らとともに、卒業ができそうです。今日のためにつくってくださった、こうもり傘と旅行カバンの写真入りチラシがステキです。ありがとうございます。風に乗ってやってきたメアリー・ポピンズみたい、と言った人がいます。でもデザインした方はその話を知らなかったそうです。わたしも知らなかったのを教えてもらいました。最終講義に似合う話なので、びっくりしました。では、メアリーのように仕事が終わると、傘をさして大空へと帰る前に一言、ご挨拶をさせていただきます。

この会場には、京都文教大学の教職員のかたがた、授業でご一緒した学生のみなさん、卒業生たち、そしてわたしがこの二年間所長をつとめました人間学研究所の催しや研究会に来て支えてくださった宇治と伏見の地域の方々がおられます。会場にはまたわたしの前任学校であった愛知県の中部大学の方、その前のわたしが非常勤講師として生きた10年間にお会いした大阪、京都の市民講座の方、そしてわたしが大学院をですぐに赴任した最初の勤務学校である大阪の帝塚山学院大学の卒業生がおひとり、ふたり、あるいはグループで来てくださいました。じつはこれで、略歴に記しました、わたしの職歴のだいたいを説明した

ことになります。会場には、帝塚山学院大学つながり、市民講座つながり、研究会つながり、中部大学つながり、京都文教大学つながりの方々がおられます。

ふつう最終講義には退職する人の専門分野の方々が集まるのですが、ここにはさまざまな分野、いろいろの職業の方が集まってくださいました。わたしが各学問分野を横断するように専攻を少しずつずらしながら、いわば学問の学際領域を歩いてきたからです。ちなみに国際が国と国の間を指し示すように、学際研究は学問領域と学問領域の間の領域という意味のことばです。じっさいわたしは文学からはじめて歴史学、言語学、比較文化の領域に居場所をもち、建築学や都市計画の方たちと深いおつきあいをするなどずっと学際領域を歩いて、京都文教大学人間学部文化人類学科には12年間、在籍させていただきました。

この会場には、わたしの職歴のいろいろな時期にめぐりあった方々が集まってくださったのですが、時期によってわたしがどんな教科の教師でありどんな分野の研究者であったかのイメージは違うとおもいます。帝塚山学院大学時代にお会いした方にとっては、わたしは途中でフランスへ行ってしまった、あるいはフランス帰りの若いフランス語の先生だったと思います。

次の市民講座時代にお会いした方々にとっては、わたしは女性史講座で日本文学や日本近代史のテーマを話す講師でした。この時期にはわたしは伝記作家でもありました。新聞雑誌で文章を鍛えていただくこともしました。ついでにフランスの友だちの半分はわたしをフランス文学のうちでもバルザックの専門家とみなしています。残り半分はわたしのことを日本文学とジェンダー研究の研究者と思っているはずです。

中部大学ではふたたびフランス語の教師となりました。文学とフランス語の授業をするほかに、大学院では当時成立したばかりであったヨーロッパ共同体についての講

義をしておりました。この時期には、わたしは日本ではフランスについて講義をし、フランスでは女性史、ジェンダー研究の研究者と共同研究をして、日本の生活について発表したり、書いたりしていました。前の時期の仕事がようやく実を結んで女性史、女性学関連の論文を執筆し、著書をまとめるようになったからです。

それらの仕事に着目して、京都文教大学新設のおりには他大学に先がけた新しい試みとしてジェンダー論のポストをつくる、比較文化論の視点を生かした授業をしてください、と声をかけてくださったのが創設時の副学長であり、ご自分も人権論を講義していらっしゃった後藤晨次先生でした。じつはそうとう頑固な独断専行の方でもあったので、大学がはじまるやいなや教務部長に指名されたわたしは教授会で毎回のよう突然の副学長提案にたいし、どうか手続きをふんで話し合いをしてください、などなど、反対発言をせざるをえなくなりました。そのたびにご立腹でした。わたしは後藤先生に「いつまでもけんか友達でいましょうね」と書いた年賀状をだしたくらいでしたが、早くに亡くなられました。創設期の悲しく懐かしい記憶です。

ちょうど京都文教大学に就任したころ、わたしのライフサイクルでは、京都に住む親たち三人が同時に病気で倒れるなど深刻に介護を必要とする時期になっていましたから、愛知県から京都に根拠地を移すことができてたいへん助かりました。どうじに、わたしのジェンダー研究関連テーマにも高齢者問題があたりしく加わりました。

Ⅱ ことばを持つことについて

職歴のつぎに研究についてお話する前に、もっとさかのぼって子供時代の思い出にふれることをおゆるしください。文化人類学に無文字文化という用語がありますが、わたしは日本列島のふだんの生活に無

文字文化があったことを辛うじて知る世代に属します。文字をもたない人との日常接触の記憶がよみがえるとき、わたしは言葉になる世界のほかに言葉にならない、はかりしれない果てのない世界があるという感覚を思い出します。それを言葉で表現しようとするのは矛盾ですが、人はそうやって未知の深い海から新しい言葉と認識をくみ上げてきたのではないのでしょうか。

じっさいにわたしが知っていた文字を知らなかった人というのは、わたしの祖父の母親、わたしの曾祖母です。わたしの子ども時代前半は太平洋戦争期でしたので、たいていの家庭の父親は戦地に行き留守でした。わたしの母親も、自分ひとりでは子どもたち全部を食わせることはできない、また空襲で子供が全員一度に死ぬことは避けさせたい、といういかにも現実主義的な判断からわたし一人を自分の父親である祖父に託しました。三歳くらいのときです。祖父の家に着いた日に、祖父が頭髮の白い女性を指してこれは白ばあちゃん、頭髮の黒い女性を指して、あちらは黒ばあちゃん、とわたしに教えました。祖父の妻と祖父の母でした。子どものわたしはすぐに、うちにはオジイチャンと白バアチャンと黒バアチャンがいるのだ、と黒白を使い分けるようになりました。その白バアチャンが字を知らない人というのは三歳児にはわかりません。言葉数の少ない人が、幼女の乗った三輪車に紐をつけて家のなかの廊下をゆっくりゆっくりとひっぱってくれた茫漠とした記憶があるだけです。

ですからこれは曾祖母が亡くなったからのことですが、祖父が自分の父親は中国地方の村で小さな寺子屋をひらいていたという話をしたことがありました。幕末から明治のはじめ、次男坊であった曾祖父は寺にはいつて僧侶になるはずでした。しかしある日寺をでて、東へ東へと歩いて大阪まで行き、何をおもったか英和辞典一冊かかえて村に帰り、寺子屋を開いたのだそうです。

若死していますから多分、労働ができないほど体の弱かった人だったのでしょう。英和辞典はどうなったのか、彼の人生にその本の出番はなかったようです。寺子屋で教えたのは四書五経、つまり漢文素読です。気難しい曾祖父は妻をめとること三度、そのたび離縁、曾祖父はわがままな男だったと思われます。さいごに嫁にきて落ち着いたのが言葉数の少ない、文字を知らない曾祖母だったということでした。

祖父は小学校にあがるまでに寺子屋に来る青年たち、少年たちにまじって、その父親から生涯で知る漢字すべてを教わったといえます。しかし曾祖父は祖父が学校に行く前に死にます。父親のいないある日、彼が机にむかって父の生前と同じく声をあげて漢文素読をしていると、突然、台所から母親が出てきて、「お前まちがとろうが、父さまの読みとはちがう」と注意したそうです。祖父が字引をひくと母親の言うとおりでありました。門前の小僧習わぬ経をよみ、のたとえどおり、祖父の母親は夫とくらしした年月、狭い家で台所仕事や針仕事をしながら、耳からきく四書五経を覚えており、息子が間違っ読むのが我慢できなかったのです。

すでに祖父の話がわかるほど大きくなっていたわたしは、わたしの知っていた白ばあちゃんが、わたしたちが字という道具で書きとめるすべてのことを耳でおぼえて生きたということに畏敬の念をいただきました。たぶん祖父が母親を尊敬していたその気持ちが伝わったのでしょう。しかしわたしは、その後こんどは文字は知っているが、学校に行くことのなかった祖父という独学の人の不思議な世界に気づくことになります。

祖父は、小学校へ行くと学校の先生よりたくさん字を知っているからということとで飛び級になって、三、四年で卒業させられ、家にお金がなかったので、学校へは行きませんでした。医者の家に住み込んで下

働きの小僧からはじめて書生になります。当時はまだ伝統的東洋医学出身の医者を近代医学の制度にとりこむ必要があったためと思われますが検定試験をうけて医師免許をとる道があったそうです。書生は働いていた医院の先生の好意で勉強し、国家試験をうけ、医師免許をとります。それが祖父の20歳のときで、25歳までその先生のところで修行して、25歳で独立して産婦人科医院を開業しました。独学の人の頼りは書物だけなので、人より早く朝四時におきて勉強し、それから診察場にむかう毎日だったそうです。

祖父の産婦人科医院は後にはかなり大きな病院になりました。評判のよい病院だったそうです。当時死亡率が高かった産褥熱は、今でいう院内感染であるということを本で読んで強い印象をうけた祖父は、病院の器具、衣類などを徹底して煮沸消毒しました。素朴な方法ですが、その努力のかいがあって入院患者の死亡率が低く、そのことが患者の口こみで広がっていったから病院が流行ったのだ、と昔祖父の病院で看護婦をしていた人が教えてくれたことがあります。しかし彼は45歳のとき、とつぜん病院をたたんで、京都にひきこもり、読書三昧の生活に入ります。自分はいいかもしれませんが、その妻、つまりわたしの祖母は看護婦学校を出た助産婦だったので彼は自分の病院をたたむことによって、妻の仕事を奪ったことになります。とうぜん夫婦仲はよくない、嫁姑の仲も悪い。そんな高齢者家庭へ小さな子供が送り込まれてきたので、三人がようやく口をきくようになったのかもしれない。

子どものわたしは大きくなっても祖父に絶対的な信頼をよせていました。病気や怪我のときつきそってくれる人、困ったとき助けてくれる人、何でも教えてくれて知らないことがない人だったからです。祖父は、わたしが中学生になったときにお祝いに万年筆をくれました。高校入学も、大学入学

もよろこんでくれましたが、お祝いをもたらしたのは中学入学のときだけでした。わたしには祖父は自分が行けなかった中学校に孫がゆくことを心底よろこんだのだということがわかっていたように思います。ですが、中学時代、わたしは勉強があまり好きになれませんでした。中学生は本質的なことを考えてしまう年齢です。わたしの悩みは言葉についてでした。

中学校から英語を習います。同時に国語の時間に文法があったのです。英語文法の用語と日本語文法の用語は今でも同じだったり違ったりします。わたしには、それがどうしても理解できませんでした。つまりその石の一つが日本語文法の「形容動詞」だったことを今でも覚えています。英語文法にも日本語文法にも形容詞、動詞がある。だけどここの形容動詞とは何か。英語文法には前置詞があり、日本語文法には助詞があるが、何がどうちがうのか。先生に質問しようにも質問がことばにならない。悪いことに中学二年生になったとき、漢文の授業がはじまりました。私立だったのでカリキュラムがかなり自由だったのです。さあ、大変です。漢文は文法ぬきで、返り点で読み方を教えます。漢文にはなんだか述語らしきものもないように見える。日本語、英語、漢文のあいだでわたしの頭は混乱し、せっぱつまりました。

そのとき、わたしは祖父が漢文が読めることを思い出しました。どんなことばで質問したのか、それは覚えていません。ただ、祖父がゆっくりとわたしの目をみて静かに「ぼくにはそれは分からない」と言ったことだけを覚えています。たくさんの本をよんで、何でも知っているはずの祖父が「分からない」と言う。子どもにとって偶像の落ちる残酷な瞬間です。そのときわたしは、とつぜん、独学の人の混沌とした世界認識をかいま見ました。じつは祖父がドイツ語の通信教育をうけたときのノートが残っており、彼はドイツ語を漢文のように返り点

をつけてよみくだし、「汝すべからく学校へゆくべし」などと漢文調で翻訳していました。彼は手持ちの材料で独特のやり方で彼の世界を組み立てている。人類学者ならブリコラージュと呼ぶようなやり方です。それで立派に生きている。もし構造を把握したいのなら理論が必要である、それを教えるのが学校だろう、と祖父が言おうとしているような気がしました。そしてまた、祖父は自分が知らない、自分の手持ちの言語ではなくみ上げることのできない認識の世界があることを知っている人だということにも気づいたように思います。

わたしはそのときようやく、日本語と英語と漢文とは、それぞれ別の構造をもつ言語として教えられているのだということに気がつきました。そのほかの数学、生物学、歴史などすべての教科が別々の構造をもつ言語のようなものだとも思いました。学校では質問はしませんでした。国語の先生と英語の先生と漢文の先生はきっとそれぞれの言語の構造を説明する理論をもっておられるが、構造と構造のあいだの、今あるそれぞれの理論では説明がつかない部分については祖父のように「分らない」とは答えず、そのような部分は「ない」、「ないものを見てはいけない」と答えるのではないかと恐れてもいたのだと思います。こうしてわたしは本質的なことを考えることはやめて、普通の子どもになって生き延びることができました。でも研究者になるということは、ときどきわたしが、中学生のときに陥ったような内面の危機がめぐってくるということではないか、と思います。

Ⅲ わたしの女性史、女性学、ジェンダー研究

フランス文学を専攻したわたしがしだいに専攻分野をずらし、それぞれの時期に自分のテーマをみつけた理由を説明しようとすればできるかもしれません。でも実際に

は、偶然の出来事と数々の出会いがそうさせました。わたしたちはひとりひとり一度きりの人生の当事者ですが、すべてを自分から作るのではなく、偶然を材料にして必然をつくるのではないのでしょうか。

学生時代、当時の大学では少数派であった女子学生たちが、助け合って生きるために集まってつくった研究会がやがて女性史研究会となりました。まだ女性史研究会ができていない頃、ある集会で議論をしたことがあります。ある同級生が、「家事労働は労働とはみとめない」と発言しました。わたしはとっさに「でも家事労働はみんなが生きるために必要な仕事でしょう。家事労働も労働だと思います」と発言しました。というのも、わたしはほかの同級生より早く学生結婚をして、大学院生をしながら毎日、二人の子どもを保育園におくりむかえし、ご飯をつくり、掃除洗濯をしていたからです。そのうえ、アルバイト労働をする必要がありました。二重、三重負担です。むろん夫も家事をしましたし、同級生たちの心強いサポートもありました。それでも毎日、睡眠時間を削るので、へとへとです。家事をどんなにきりつめても日に四時間、五時間ととられます。これが労働でないなんて、という言い分でした。

でも発言者は自信をもって「労働とは交換価値を生む働きを指します。あなたがいうのは使用価値のことです」と型どおりの返事を返し、誰もわたしをサポートしてくれません。当時はマルクス主義経済学と唯物史観の時代です。「それって、マルクスも近代主義者だということじゃない」とさらに反論すればよかったのですが、そのことばが出ない。マルクス主義理論がすべてを説明するかのような時代でした。でも、そのことを理論的に説明したのが10年後のマルクス主義フェミニズムだったので、家事労働が家族愛の名のもとで行われる不払い労働である理由は、性別分業でなりたつ近代家族制度にあること、家族扶養

賃金があるというフィクションにもとづいて、たとえ同一の賃労働をしても家計補助労働とみなされると賃金は低くなることなど、その仕組みを明らかにしました。マルクス主義フェミニズムは、ほんとうは批判的マルクス主義フェミニズムと呼ばれるべきなのです。

この話には、30年後につづきがあります。京都文教大学に大学院が開設されたとき、ひとりの受験生が口頭試問で研究計画をきかれるや、「わたしはわたしがアルバイトをすると、時間給で支払われるが、おばあちゃんの仕事の全部とお母さんの家事とは、労働とよばれず、賃金が支払われることがないのは何故か知りたい。それからわたしがアルバイト先まで自転車で走ってゆくその時間は労働にカウントされない、その理由を知りたいのです」という意味のことをしどろもどろに言うやおお泣きに泣き出してしまいました。わたしも面接委員だったのですが、おもわず彼女に声をあわせて泣きたくなりました。30年前のわたしが彼女の姿をしてそこにいたからです。

わたしはようやくの思いで「あなたが言ったその問題こそ、この30年間の女性学の主要テーマだったのよ。先行研究があるのですから、続きを考えることができるから大丈夫」といいました。入学するとわたしのゼミに来たので、わたしは始まったばかりの介護保険の現場を調査地とすることをすすめました。介護保険制度により介護の仕事は労働になったばかりなのですから、彼女のテーマにぴったりです。彼女はヘルパー養成講座に3週間かよい、資格をとることからはじめてやがて現場に入ってゆきました。

彼女の調査と論文からわたしは多くのことを教えられました。ヘルパーさんたちにはさまざまな勤務条件のなかから働き方をえらぶことができます。24時間介護体制のどの時間帯が勤務可能か、週に何日、何時間、現場ではたらくことができるか、そ

れにより、時間給も、社会保障のあり方もちがう。各人の選択の背景にはその人が他の家族を扶養する主たる働き手なのか、他に働き手がいるのか、家に自分の賃金のすべてをいれるのか、そうでないのか、また出勤のあいだ家事をしてくれる人手があるかないか、介護ヘルパーをするほかに自分の家族にさらに被介護者がいるかいけないか、の別があって、それが労働条件を選択させているのです。選択の自由があるようで、じつはそうではない。介護に家族外からの参加があることで、閉ざされてせっぱつまっていた家庭が外へむかって開かれ、そのことによって高齢者もその家族も新鮮な空気を吸うことができるようになりました。でもそこから次ぎの問題が発生する。ヘルパーさんたちから、「ヘルパーは社会の嫁か」、という強烈な疑問の声があがる。論文は主婦たちが介護労働者となったからこそ、労働の当事者として家族と労働の両方をジェンダーの問題として問うことができるようになったところまでを共感をこめて見ていました。今日会場にいる論文の執筆者は、今も介護の現場で働いています。

話をもとに戻しますと、わたしは大学院をでるとオーバードクターにならずに、就職することができました。1960年代後半になると多くの女子学園が四年制女子大をつくり、女子学生亡国論がでるほど大学進学率があがったのでした。わたしは新設されたばかりの帝塚山学院大学に就職しました。優秀な学生たちと、共学の大学にかわらないカリキュラムと施設、研究制度です。はつらつとした学生たちといっしょに不慣れながらそれだけに新鮮な授業にとりくんで、わたしは元気だったとおもいます。でも一つだけ気になることがありました。ときどき、学生がわたしに何故結婚したのか、子どもはどうしているのか、とたずねます。気がつくと、大学には就職部がない。学生たちの出口は用意されていない。会議でたずねると、男性の先生方が、学生

は全員が結婚しますから就職部の必要はありません、といわれる。はじめて学生たちがわたしを男性というジェンダーに分類される教師と母親役割をもつ女性というジェンダーの両方に所属する両棲動物のように見ていることに気づきました。

わたしが女性史研究会で女子大論を報告し、論文を書いたのはその頃でした。わたしは現状分析をした後で、考える力と表現力をもったが出口を用意されることのない大学卒業生を大量にうむことによって、何が起こるかを予想しています。「この層が本当に力をもつためには自分たちの行動と表現の形を見出さなければならないだろう。女子大が年々おくりだす卒業生の量がいつか社会の女性観をかえる要素をもっている」。

予想はあたりました。彼女たちこそ団塊の世代の女性たちであり、ウーマンリブ運動をはじめ、フェミニスト運動から女性学を生み出す世代でした。他方、団塊の世代は結婚率の高い世代です。実際、帝塚山卒業生の9割以上が結婚をすることになります。そしてその後偶然の出来事から一旦、大学を出て在野の研究者になったわたしは、彼女たちの世代と市民講座で再会しました。じっさいには市民講座にはさまざまな生育歴と職業の人たちがやってきました。子連れで講座にやってきて、保育を請求し、どんよくに学び、発言をはじめ、労働とは何か、家族とは、子供を生む、生まないは誰がきめるのか、と次々と本質的な質問をつきつけてくる相手にたいして、格闘しながらわたしは近代家族論という後のテーマをそこで育てつつあったのでした。

10年後にわたしはもう一度、大学教師になりました。理論が必要であることを身にしみて感じ、そのためには研究室と研究時間が必要だったからです。中部大学はその二つと研究仲間を与えてくれました。研究仲間は学内だけでなく、各大学との研究交流、それから海外へもひろがりました。

ありがたかったです。

中部大学にいた間中、わたしは大学に隣接するニュータウンにひとりで住んでいました。単身赴任です。週末だけ家族の住む京都に帰りました。団地の窓からは無数の瞬く窓の明かりがみえます。わたしは毎晩それを眺めて考えていたのですが、何を考えているかはなかなか言葉になりませんでした。ただ考えることのできる自分だけの時間と、そして信頼できる研究仲間とをもつ幸せを自覚していました。わたしは外国語教室の同僚たちと、対照言語学の方法で、言語調査をしていました。住まいに関する語彙を日本語、英語、ドイツ語、フランス語のちには中国語で比較すると当然、一つの単語と一つの単語また指示物と指示物のあいだにズレがあり、隙間もあります。そこから考え始める比較文化論でした。ひとつ大きな発見がありました。日本語の「家庭」という単語が、とくべつな単語であるということがわかったのです。

まず「家庭」は英語のホームの翻訳語をさがして中国の古典で使われている「家庭」を最終的に採用した明治の新語であること、しかも中国をはじめとする漢字圏に逆輸入されて主に各国の家族政策の用語として広まったという語源的な特徴がわかりました。良い家庭、明るい家庭、健康な家庭など、この単語はネガティブな形容詞よりもポジティブな形容詞をとるという特徴がある。動詞との組み合わせはもっと面白く、家を継ぐとはいうが、家庭を継ぐとは言わないから一世代かぎりのものを指すらしい。家庭は空間ではあるが、家庭で食べるとか、家庭で死ぬとはあまり言わず、具体空間というより抽象的である。さらには、家庭は小学校のプリントにご家庭と頻発されるように人格をもった法人、あるいは団体をあらわすこともある、などです。そこから出た結論は「家庭」という語には、あるべき家庭規範が最初から含まれているというものでした。

この結論が、後にわたしの近代家族論に成長します。「家」家族から「家庭」家族が分離し、「家庭」家族から個人が出現するとき社会道德の規範はどう変化してきたか、近代以後にはひ弱な個がお互いにどう集まり、どう助け合うのだろうかという近代家族論、家族の住まいの変遷を見る住宅論は、京都文教大学のジェンダー論と文学論の授業をしながらしだいに構想をふくらませてゆきました。著作年表にある『借家と持ち家の文学史』、『家族と住まいの物語』が、京都文教大学で書いた本です。ここに着任した第一印象は前任の中部大学とおなじく、ニュータウンに隣接した大学である、まちがよく似ているということでした。ここで住宅論と地つづきのような都市論、なかでもニュータウン研究をはじめであろうという予感がありました。そのとおりになりました。

京都文教学園はまず共学の四年制大学を新設して、女子学園が共学の学園になってきました。だからジェンダー論の科目をおいたのだと思います。第一年目、わたしのゼミの学生は女性ばかりでした。しかし二年目には男女半々になり、以後、男性が過半数になることもあり、女性が半分を超えることもあり、です。

最初に男子学生が二人連れ立って研究室へ来たときはおかしかったです。ひとりが、「先生、こいつの悩みを聞いたって。彼女にむかって、俺についてこい！って言うて後ろを振り向いたら誰もいいひんかった、それがこいつの悩みなんや。どうする？」というのです。それから二人はわたしをそっちのけで、どうしたら女性をひきつけることができるか、を延々と議論し、最後にもしかして、ついて来いではなくてついてゆくわでもいいんか、とか、ついてこい、ついてくではあかんわ、いっしょにゆこか、かな。しんどいときは待ったるし、あんたも待ってや、でええんかな」と普通の結論にたっしていました。

またゼミの過半数が男子学生であったとき、男子学生になぜジェンダー論のゼミに来たの？とたずねると、女性はこのごろ理論武装してるやん、うっかりすると言ひ負かされるからこちらでも理論を身につける、なんで女性には結婚永久就職というもう一つの道があるのに、男性にないのはなんでや、なんで男は妻子を養わなくてはならないのかを考えるためにきた、なんで女だけ化粧できるんや、僕かて化粧したいし、きれいな色の服がきたい」などなどの声が噴出しました。ジェンダー論の授業は、学生たちの反応の一つ一つがおもしろいだけでなく、また新鮮で、わたしは現代社会のもっとも良質なインフォーマントに出会っているということを感じていました。

それから、京都文教大学では図書館で鶴見和子文庫にめぐりあいました。鶴見和子さんは1950年代に、これまでの学問は研究対象を客体として、モノとしてあつかってきたが、これからはそうではなく「自己をふくむ集団」の研究をはじめなくてはならないと何度も言い、働く人たちがはじめた生活記録運動に参加しました。わたしはなんだか不思議でした。わたしたちの世代はこれを解き明かさなければ自分が生きてゆくことができない問題がこれだ、と思いつめて「自分をふくむ集団」の研究をはじめ、女性史、女性学、ジェンダー研究とすすむにつれて異性という他者、異文化という他者を視界にいれることができるようになり、他者と共存する世界について考え始めました。鶴見和子さんとわたしたちは逆ではないか、と不思議であったのです。でもしだいに鶴見和子さんが、当事者が自分のことばで自分の問題を表現していいのだ、ことばを獲得しなさい、と早くから言ってくださったからこそ、次世代のわたしたち戦後の女子学生は、「自分をふくむ集団」の問題をとりあげることが許され、女性史、女性学、ジェンダー研究の道をきりひらくことができたのだ、と気づきました。

Ⅳ ことばをリレーする

「言葉をリレーする」は、わたしが『環』という雑誌にたのまれて、京都文教大学図書館にある鶴見和子文庫について書くようにと依頼をうけて書いた文章につけた題です。副題は「鶴見和子文庫をひらいて」でした。鶴見和子文庫にかんしては人間学研究所で2006年度に四回の連続シンポジウム「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」を行いました。2007年度には6月にすこし大きなシンポジウム「生活綴り方から『戦後』を考える」を企画し、子どものための生活綴り方から出発した農民文学の作家である山形県の佐藤藤三郎さんとおとなのための生活記録運動をはじめた澤井余志郎さんをおまねきして、農村地帯の戦後60年の変遷と深刻な過疎の問題、石炭から石油へとエネルギー革命を行った工業地帯の戦後60年と石油コンビナートから発生した公害問題について報告していただきました。わたしはシンポジウムを準備するために佐藤藤三郎関連年表と澤井余志郎関連年表と社会変動年表を併記した「つづき読み、ならべ読み年表」を作成しながら、そこから戦争と経済の高度成長という大きな事件、その結果としての産業構造の激変と人口大移動という生々しい現実がうかびあがるのを見て胸の鼓動をおさえることができませんでした。わたしたちの誰ひとりとして、社会変動の波をのがれることができない。すべてが関連します。京都文教大学の共同研究が長年とりくんだニュータウンという空間もまた、この年表にあらわれた人口大移動の受け皿でありました。

女性史、女性学、ジェンダー研究の分野でわたしがしてきたことは、鶴見和子さんが共感した生活記録運動を別の形で始めたのではなかったのか。中学を卒業すると四日市の紡織工場に集団就職し、そこで澤

井さんとともに生活記録運動をはじめたかつての女性労働者、現在は農村の大黒柱となっている女性たちは、昨年6月のシンポジウム会場に来てくださいました。わたしはこの方たちとほぼ同世代です。

しかし研究者となって言葉と理論を手にいれるということは、自分の出自をなかば裏切るということでもあります。わたしは生活記録運動の方々とおなじく自分の生活をテーマにして研究を行ってきました。生活を政治や経済と別物としてとらえるのではなく、個々人の生活こそ政治と経済の舞台であることを明らかにし、生活の側から政治や経済をとらえてやろうとして悪戦苦闘してきたつもりです。しかし、わたしはわたしが問題を発見する手助けをしてくださり、一緒に考えてくださった方たちにお返しをすることができるのでしょうか。

人類学にはネーティヴ・アントロポロジストという用語があります。ネーティヴは原住民のことです。アントロポロジストは人類学者で、もともとはネーティヴの文化を対象にして研究を行う人のことです。ですから原住民にして人類学者であるネーティヴ・アントロポロジストとは、形容矛盾のある落ち着いた存在です。文化人類学者にたいする情報提供者であり、通訳であったインフォーマントが人類学の言語と理論を獲得してネーティヴ・アントロポロジストになって何をするのか。出自集団からみれば裏切りと貢献のなかばする存在であるでしょう。しかし矛盾的存在である彼は、人類学そのものの言語と理論を変える可能性をもっているはずで、わたしもまた、文字をもたない人たちに育てられて、やがてことばと文字をもつ研究者になりました。出自集団にたいして裏切りと貢献とがあいなかばする存在である点において自分もまたネーティヴ・アントロポロジストに近い存在であると感じています。

わたしは研究者となったことで育ててくれた人たち、研究テーマと研究対象を提供

してくれた人たちにたいし、返すことができない負債を負っているように感じます。このような負債は、原則として借りた人に返すことはできません。次の人に返すことになります。それが「ことばをリレーする」ことの一つの意義でもあるのではないのでしょうか。

もう一つ、自分がかつて発したことばを引用してわたしの報告を終えます。「一度よく出会ったものたちは、いつかどこかで再び会う」。きょうの会場がすでにこの予言を実現しているとうれしいです。そして、またどこかでお会いしましょう。さようなら。ありがとうございました。